

# 小田原史談

第167号

発行所 小田原史談会  
小田原市栄町2-13-20  
アオキ画廊内 皿(24)0637

## 足柄茶の始祖

### 細谷力蔵さんを語る

#### お茶の話②

三谷喜久満

お茶の話で足柄茶のことを語るに当たっては、絶対に落としてはならない尊い人の話がある。それは「細谷力蔵さん」の話である。

#### 一 自力更正

思えば私が小学校三年生の春(昭和二年)のことであった。足柄上郡



細谷力蔵さん 藍綬褒章受賞を記念して  
細谷力蔵さんは、以前は神繩村、山市場、川西村とに分かれて居たが、小さな村が分立していても地域の発展は、とても望むべきもなかった。川西村の村長細谷力蔵さんは、此処に着目して、四か村を統合して一村となし、大所高所より村の政治を執るべきだと判断し、村の合併の為に寝食を忘れ、

東奔西走して清水村を発足させて初代の村長に就任したのである。それは大正十二年四月のことだった。私の父(正作)は、東海道本線谷峨信号所の駅長であって、地域の情報を把握することは大事な仕事の一つであったのであろう、何時も信号所には村の人が来て、雑談しているのを見かけたものである。

父が母との会話のなかで、細谷村長は信念の通った、実行力のある人だと評していた事を覚えていた。

昭和二年と言えば、世界金融恐慌の最中で、その煽りを受けて、日本経済は不況のどん底であった。それに関東大震災の後であったから、国や県は被災地の面倒を見ることが出来ず、「各自治体は自分の力で生きて行け」と自力更生の苦肉の策を提唱したのである。

ご多分に洩れず、清水村は関東大地震の震源地で最大の被災地であった。山は崩れ、谷は埋まり、田圃は裂けてしまった。秋の台風襲来による大雨と梅雨末期の集中豪雨等により、山肌は流され、谷は鉄砲水により土石流となって、清水村の中央を流れる酒匂川に一気に流れ込み、洪水となって川沿いに残っていた田畑を悉く流してしまった。村は踏んだり、蹴ったりの悲惨な被害を受けたのである。

このように惨憺たる状況のなか、村長に就任して間もない血気盛んな細谷力蔵村長は、窮乏した村の財政

を建て直すため、自力更正のいろいろの施策を考えたとある。まず、村民が如何に現金収入の道を作るか、と言うことであった。

それは何といっても米作が一番であるが、谷間に張り付くように造成されていた田圃は、悉く裂けたり崩れて流されてしまったので、其処からの現金収入は不可能であった。

続いて、いろいろと思考し提案されたのが、酪農、コンニャク、お茶、養蚕、養鶏、養豚であった。村の吏員を先進経営の地域に派遣し、現地の実情とその意見を基に討論した結果、まず酪農とコンニャクは脱落した。

酪農は既に隣村の共和村(山北町)で試みられ、共栄社と言う会社経営で牛乳の処理、販売が始められていて、その実情が判っていた。牛の飼料代と乳量との比例、諸経費、販売経費、乳の生産過剰の場合大手業者(森永、明治)に買い叩かれる哀れな状態になること。

コンニャクは、群馬県下仁田地方が産地で盛んに生産されている。下仁田と比較すると、先ず土地の条件が違ふ。清水村の畑地は、山地の急斜面が多くて耕作の体力の消耗が著しく、収穫できたコンニャク玉の運搬が容易でないのである。

丁度、その頃であった。谷峨信号所の裏の崖下に武尾嘉市さんの屋敷があった。其処に独りの青年が間借りをして住んでいた。その人は群馬

県確井郡から来た養蚕の先生であった。村では養蚕の技術が向上したので、その人の使命は終わった。谷峨の部落の人をお嫁さんに貰って住んでいた、柳沢と名乗る人だった。この人が、谷峨の東部の山を開墾して、自分の郷里からコンニャクの種を取り寄せて、コンニャク栽培を始めた。

本当によく逞しく働く人であった。遠い畑に通うのは大変な事だったのである。コンニャク玉が収穫された、この玉は製品ではないのである、これを洗って輪切りにしてスキの枯れた棒に串刺しにして、スタレのようにし、天日に掛け干しにして、充分乾燥したら、これを石臼で引いて粉にする。その粉は、清水村ではコンニャクに出来ないから、群馬へ送って製品にするのである。

このコンニャク作りの過酷な実態を見た村の人は、誰ひとりとして試みようとする人は居なかった。そして、この仕事に携わっていた柳沢さんは、経費倒れするコンニャク作りを止めて、当時国が積極的に募集していた満蒙開拓団に応募して村より去ってしまった。

結局、養蚕、養鶏、養豚は村人の堅実な副業として細々ではあるが、現金収入の途になったのである。しかし、これらは、必ずしも手放しで安心出来る産業ではなかったのである。

養蚕は、生産品が全て輸出に依存した産業であるから、世界の市況に

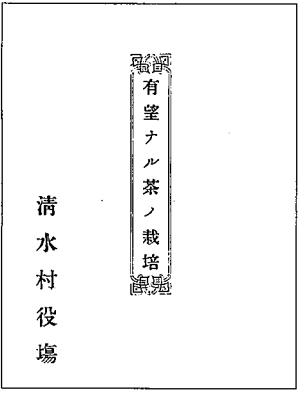
左右されて、安定した収入源にならないときがしばしばあったのである。養鶏は、飼料と産みだされる卵の相場の変動と、取り扱う際の損失と諸経費で、積極的に投資してまで経営してよいかどうかさぶる危ぶまれた。

養豚は、飼料は低廉であって、踏み肥の有機肥料が副産物として自家消費に還元できて有望な副業として見込まれた。しかし、ある年のこと、突如として村を襲った「豚コレラ」が村中に蔓延し、猖獗を極めて、その対策に手の施しようが無くて大きな損害を被ったことがあった。

このように、それぞれ利害損失はあったが、この三者は、細々ではあるが、村に定着した副業になったのである。

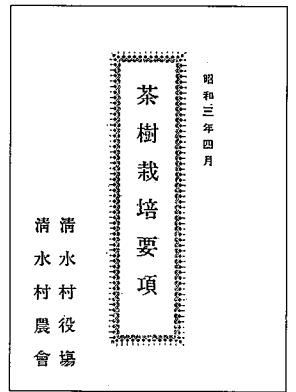
一方お茶であるが、細谷力蔵村長は、村おこしの最も重要な米に替わる産業として、茶業の採用を決め、大正十三年村費を以てお茶の種子を大量に購入し、各農家に配布した。この種子を各農家は、最寄りの雑木

茶業現地調査報告書(大正13年)



有望ナル茶ノ栽培

清水村役場



昭和三年四月 茶樹栽培要項

清水村役場 清水村農會

林を開墾し、また、農作物植えつけに不向きな斜面を積極的に茶畑に転換して播いたのである。

昭和四年の春、私が小学校五年生の時、学校の周辺に播かれてあったお茶の木も、最初の頃は、境界線を示す生け垣かと思っていたら、立派に育って、お茶畑となり、一番茶の茶摘みが行われた。私は、その時初めて、茶摘みの方法を教えてもらって、お茶摘みを体験したのである。

村では、その若葉の収穫の時期に合わせて、小学校の校門の脇に製茶工場を昭和三年に竣工して、昭和四年の一番茶から稼働始めたのである。第一回の茶摘み、即ち一番茶の若葉が各農家から続々と運ばれて来る頃、村の雰囲気は五月の陽光に照り映えて、雌伏すること五年の苦渋と不安が報われ解消して、村には明るく活気が溢れていた。

私は、製茶の工程に興味を持ち、学校の休み時間に工場の窓越しに、若葉が蒸気に蒸され吹き飛ばされ、それが清潔な箒で掃き集められる。そして次の工程に入って行くが、それは残念だったが見られなかった。

若葉が吹き飛ばされる付近では、とても青臭い匂いと、蒸れた香りが鼻を突いていたが、お茶が出来上がる工程の窓辺では、香ばしい香りと、出来上がった青黒い上等のお茶の山がで上がり、次の工程に入っていた。

その子供の頃に見た工場の製茶方法は、農家が自宅で作ってきた方法と似ていると聞いていた。最近の製茶方法は見ていないから何とも言えない。

二 細谷力蔵さんの功績

父が信号所の駅長として、職務上収集した細谷力蔵さんの人物評価は大変良く、また、その功績も多く次に述べることにする。

そもそも細谷力蔵さんは、頭脳明晰で有るから、頭の回転が速い。いわゆる、一を聞いて十を知る人であった。先見の明があり物事を遠観する能力が鋭かったので、四カ村を合併して清水村を発足させる偉業を為しとげた。

(1)関東大地震で大きな被害を受けた清水村各地の山の崩落の修復に、内務省の土木出張所の出先機関を神繩部落に招致して、遅々ではあるが治山治水事業として、崖崩れの現場で砂防工事を進捗させたことである。そして、それによって、村人は日雇い労働の賃金を手に入れることが出来たのである。

(2)平成八年現在では、国道二四六

号は、旧掬子橋の横に新掬子橋と掬子トンネルを抜けて谷峨部落をバイパス道路で北に迂回し、清水橋を渡って、鮎沢川左岸を通って静岡県に至る、国の大動脈になっている。しかし、昭和二年の当時は、山北から青根に至る道路が県道に指定されていて、その道は酒匂川の左岸を通って、山北―沼津線(現在の国道二四六号)は、未だ谷峨部落を通れず、ハッキリした道路になっていなかった。その頃の掬子橋は、吊り橋で朽ちていて馬力の車も通れなかったのだ。谷峨部落は離れ島のようにであった。谷峨部落の西、河内川と鮎沢川の合流点の鮎沢川に清水橋を鉄橋で完成させたので、谷峨の人々は、ここので漸く、村役場のある峰下へ容易に行き来出来るようになった。村長の度重なる陳情が功を奏して、掬子橋も鉄橋で開通した。そのお陰で清水村全体の交通事情は、小田原、平塚、秦野にむけて非常に便利になったのである。

(3) 清水橋を架橋し県道を諸淵まで開通するには、峰の山が鮎沢川まで張り出していて、切り通しを造らねばならなかった。その山は細谷力蔵さんの所有する山であったから、その山全部を県に無償で提供して県道完成させたのである。

(4) 丹沢山塊の西部、酒匂川沿いの村、清水村は世間から取り残されたような寒村であった、谷峨部落に東海道本線が通っていて信号所が設置

されているのだから、これを駅に昇格して、せめて旅客のみの駅で良いから開設して貰えないかと、細谷村長は、大正年間に何回か鉄道省に陳情した。しかし、谷峨の地域は勾配が急で、屈曲が激しく、雨期には出水、崩落がしばしば起きる難所で、東海道線の中で最大の危険地帯とされていた。駅を開設しても、予想される乗客の数、機関車の発車に要する蒸気エネルギーの損失、定時運転の確保が難しいと言う理由で、陳情は却下されてしまった。

(5) そこで細谷村長は、村民の交通の便を考えて、自動車運送事業を当時の監督官庁の鉄道省に申請して村営で経営する免許を取得した、それは大正十五年の頃であった。最初は幌型のセダンを四台購入し、山北駅と清水村川西の村役場前まで運行していた。その運行方法は私は知らなかったが、駅に発着する普通列車の度に走らせていたようだった。村営自動車が発業開始した時は、掬子橋と清水橋が完成していなかったのだ。車は、嵐下の県道を通り川西橋の吊り橋を渡って、峰下の役場前へ至ったのである。細谷力蔵村長退任の後、掬子橋と清水橋が完成したのを機に、セダンを廃止して箱型のバスに買い換えて谷峨部落を経由するようになった。谷峨の人々には福音を齎したのである。次第に利用客も増え、時間帯によっては満員で走っているのをよく見かけたのである。

このバスの運行も大東亜戦争になってからはどうなったか、その後の成り行きは知らない。

(6) 村の役場の在る峰下と言うところは、村の中心地であった。其処には富士水力発電所と東京電力の変電所があって其処には社宅が五十世帯も立ち並んでいた。そして小学校、信用組合、旅館があり、人口が多かったから酒造店、食料雑貨、魚屋、豆腐屋、足袋屋、鍛冶屋があった、警察の駐在所もあって一寸した町の様相を見せていた。細谷村長は、このような街に郵便局が無いのは不便だということに着目した。ところが、郵便局を開局するには通信省に多額のお金を出さなければならなかった。細谷村長は、その時はもう既に自分のお金は無くなっていた。頭の牙えていた村長は峰下の酒造店を営営している山崎光平さんに相談した。人の好い光平さんは直ぐ承諾して金を出してくれたので、郵便取扱所を開設する認可が下りた。

一方、大正十一年に清水小学校には、谷峨出身の武尾帰一先生が横浜の大綱小学校から転勤して来られていた。ところが大正十四年、先生は心臓麻痺で突然逝去された。先生は享年三十三歳であった。子供さん三人を残された奥さんのタケさんは、一時、清水小学校の代用教員をされていたが、事情があって、子供と共に秦野の実家へ引き上げていた。義侠心の人一倍強い細谷村長は、直ちに秦野に連絡してタケさん一家を峰下へ連れ戻した。

細谷村長は、タケさんを郵便取扱所の事務員に採用し、出来るだけ高い給料を支給すると約束し、タケさんの自己資金で住宅兼事務室の局舎を造らせた。だけど、タケさんの家計はやり繰りが大変だったので、文具店も兼営することになった。かくして清水村にも郵便局らしきものが出来上がった。時代の推移と変遷があって、現在の山北町川西の三等郵便局になったのである。

### 三 失意の離村

昭和四年の十二月、私が小学校四年生の時であった。村長の細谷力蔵さんが家族と共に夜逃げをしたと、学校で人の口伝に聞いたのである。私は当時、子供心に夜逃げとはどう言うものかが判らなく、一体残った家、屋敷はどうなるのか、家族たちはこれからどう言う生活をするのだろうかという疑問に思った。

たまたま、父が明け番で家に居るとき、私は父に対して細谷力蔵さんが村長であるのどうして夜逃げをして村を出ていったのか質問したのである。父は私が理解できると思っただろう、次のように話をしてくれた。

関東大地震で最も大きな被害を受けた清水村を復興するには、県の力を借りなければ到底出来ない仕事である。治山、治水の工事は内務省に

陳情し、自動車運送の事業については鉄道省に認可を得なければならぬので陳情に赴いたのである。崖崩れの復旧、道路の建設、橋の架け替え等、いろいろの問題で官庁に陳情し、現場に案内し、証明し、其処で問題の質疑応答をするに当たっても、会議場の準備やその費用、時には宴会を持ち、また辺鄙な所故に、人力車の用意から宿泊の面倒を見なければならぬのであった。

ところが村長と言う職務は、名譽職と言って、給料は無いも同様であった。名目はなにがしかはあっても雀の涙程である。それは村が疲弊して村に金が無かったからである。従って役人の接待に関する費用は言うに及ばず、自分の出張する色々な費用等は村費で賄えなかったのである。細谷村長は自分の持っているお金は全部使い果たしてしまつたので、峰部落の大家(細谷麟平)をはじめ、身内や部落の各家から借金をしたのである。そして遂には、隣村の川村山北の懇意にしていた県会議員の松川惣右衛門さんからお金を融通して貰って、村の為役人接待を続けてきた。そのお陰で村の復興は著しく順調に進んだのであった。

その時代、日本の政治は政党政治の華やかな時であった。神奈川県西部地区は、政友会と民政党が地区を二分して相争っていた。政友会は鈴木英雄氏が、民政党は平川松太郎氏とそれぞれ磐石の地盤を固めてい

た。其処に新進氣鋭の若手、河野一郎氏が政友会から名乗りを挙げて立候補して来たから、村の中は俄に騒然となり波風が立ってきたのである。しかしその頃、谷峨部落には人望があつて、政治手腕のある、村長候補の人材が大勢居った。中でも「口八丁、手八丁」と言われた人、村会議員の尾崎晃太さんが、細谷村長の村政に批判的で、ある時は真つ向から反対したのであった。尾崎さんは剛毅で頭が良く、竹を割つた様な気性で、正義感が強く、一度言いだしたら押し通す一刻な人であつた。

ある時、村会の議場で尾崎議員は「村長は役人接待に名を借りて、村費を使って若者買いに浮き身をやつしているではないか。……このまま細谷力蔵を村長にして置くことは村を没落せしめ、村を何処かに売り渡しかねない。……速やかに退陣せよ……」と攻撃したのである。この発言の裏には、政党内の確執があり、それが表面に出たのではあるまいかと推察された。

しかしこの頃になると、細谷村長は、自分の行動や意図を誤解し、中傷誹謗した反対派の攻撃に対して正面切つて闘う氣力が無くなったのだろうか。また一方、今まで味方と信じていた人々も援護する事無く沈黙していたから、細谷村長は四面楚歌の声を聞くような状態になつてしまつたのであった。

哀れるかな、細谷村長は、この

時には既に財産は殆ど金に換え、使果たしてしまつたのである。この時のように罵倒され無様なわが身を振り返つて、自分は今まで何をしていたのだろうか、一体、村長とは何だつたのだろうかと疑問を感じて、村長をしてる事に嫌気を持ったのである。

細谷力蔵さんは突如、村長を辞任し、ある日、人目に立たぬように、家を居抜きのまま家族と共に峰の部落を後にしたのである。力蔵さんはまだ若い四十歳であつた。心なき村人は、これを村長の夜逃げと嘲笑していたと言ふことだつた。確かに私は、その声を聞いた覚えがある。

私の小学校の級友、細谷晴次君は細谷力蔵さん宅の隣り合わせに住んでいた関係で、当時の事を詳しく知つていて、夜逃げと言ふ言葉には強く反発して、細谷力蔵さんの離村の様子を次のように話してくれた。

「細谷力蔵宅は借金でどうにもならなくなり、身内の人、部落の人と相談して村を離れることにした。借金の始末については大家の細谷麟平さんに任せられた。ある朝、農機具は勿論のこと家財道具は殆ど置いたまままで、日常生活に必要な品物を山車に纏めて積み込んで、峰の山道を峰下まで下り、其処に待たせてあつた馬力屋の車に積み替えて、人目を避けるように村を離れていったのである。家財のうち、大きなもの、箆筒、長持ち等の家具は谷峨の南の武尾家、奥さん(きくよさん)の実家で引き

取つて預かつたらしい」と。

細谷晴次君の話を聞いて、人が倒産、即ち没落の憂き目に会うことは、何とも言いようのない無念で寂しいものだ改めて思つたのである。

#### 四 流 転

細谷力蔵さんは家族共々、取り敢えず落ち着いた所は松田町の或るしもたやであつた。無一文になつた力蔵さんは、家族を養うために、何処かで職を求めなければならぬ。それには何としても都会へ出なければならぬと決意して、横浜へ出ることにした。

何の経験もない商売を始めようとして、最初に食べ物屋に手を出し、アイスクリーム売りもした、荒物屋も開店して見た。これらは全部が武家の商法で元手を食べてしまつたのである。横浜で過ごしたのは約二カ月であつた、何処をどう転々として過ごしてきたかははっきり判らない、悲惨な生活で在つたらしい。

力蔵さんの長男の賢さんは永い間連れ添つてきた奥さん(たまえさん)にも横浜の話は絶対にしなかつたが、ある時ヒョーンな事で「横浜ではこの世の奈落の底、地獄を見てきた」と洩らしただけで、その辛かつた具体的な話は一切語らず、平成七年八月、賢さんは多発性脳梗塞で他界されてしまつた。たまえさんは寂しく述懐していられた。

賢さんの葬儀ののち、夜のこと

あった。弟の孝<sup>たかし</sup>さんが仏壇の位牌を前に置き、本当に親しげにしみじみと、次のように語り始めたのであった。

「兄さん。……横浜でのあの時は実に空腹で辛い惨めな思いをしたっけね。……ある夕食のとき、時間になっても食事の音が掛からなかった。家には食べるものが無かったのだ。兄さんは私の様子を見て、孝、外に行こう。と言って私を外へ誘い出した。別に物を食べに行く訳でも無かったのだ。兄さんは近所の公園のベンチへ連れて行って、其処で二人は横になった。近くの水道の水を飲んで、辺りが暗くなるのを待って家に帰ったのだ。兄さんがあの時どうして私を外へ連れだしたのかと言うことが後で判った。私のことだから、お母さんの側でよろよろしている、お母さんはたまらなく辛くなる、其処で兄さんと僕がお母さんの前から居なくなれば、お母さんは少しも気が楽になると思ったのですね。……兄さんは本当に、優しい心遣いをしていたのですね」

たまえさんは初めて、孝さんの追悼の言葉で横浜の悲惨な苦難な生活の一端を窺い知ったのであった。

昭和五年一月の事であった。藤沢町の町長金子小一郎氏は、細谷力蔵さんが苦境に喘いでいると聞いて、三顧の礼をもって迎え、藤沢町の総務部長の椅子に就けたのであった。細谷力蔵さんは此処で一息した

と思ったのは束の間であった。藤沢町が市政を施くことになり、昭和六年十月退職せざるを得なかった。

昭和七年七月になって、足柄下郡大窪村で助役の欠員があり、しかるべき手腕の人を求めていたので紹介されて就任したのである。

大窪村は、箱根への入口の村で、気候温暖で環境が好く、物資が豊富で村の財政経済は豊かであった。力蔵さんと家族は、此処で漸く身も心も安らぎを感じる、静かな生活を送ることが出来たのであった。

昭和十五年十二月、大窪村は小田原市に合併することになった。小田原市に合併の残務整理で暫く小田原市の主事として在職していたが、昭和十六年二月に再び藤沢市より助役就任の要請があり、藤沢市に移り住んだのである。

この藤沢市へ移って来てから間もなくのことであった、力蔵さんの母親きくさんが昭和十六年三月二十七日、享年八十歳で身罷られたのである。きくさんは足柄上郡山北町日向(旧川村日向)より川西村峰に嫁してきたのである。結婚してもなかなか子供が授からなかった。子供が授かるようにと神様に願掛けして、漸く力蔵を恵んで戴いたのである。一人っ子であったから、きくさんはそれはそれは大切に育てて来たのである。

きくさんは、常々力蔵さんのことを「この子は神様から授かった子だ、神様の申し子だから粗末には出来な

い」と言っていたのである。

その言葉に違わず、幼少の時から利発で神童ぶりを発揮していて、立派な青年に成長した。明治四十四年四月には足柄上郡川西村外三か村組合の収入役になった。歳は二十二歳であった。

このような事であったから力蔵さんの両親は、力蔵の成すことには一言も意見を差し挟む事はしなかったのである。そして力蔵さんの父親は大正八年に他界したのである。

清水村の村長になるや、関東大地震になり、村の復興に、村の経済の建て直しに、私費を投じて寝食を忘れて活躍した。母親のきくさんは、わが家の財産が日に日に減っていくのを目の当たりにみていて何も言わなかったのである。これは神様が力蔵に成り代わって村の為に働いているのだ、と言っていたと言う。力蔵さんが藤沢市の助役に就任したとき、きくさんは「力蔵は神の子だから神通力を発揮して藤沢市に尽くす事だろう」と力蔵の活躍を信じつつ泉下に旅立たれたのである。

昭和十九年八月、細谷力蔵さんはその手腕を買われ、当時、食糧流通に困惑していた川崎市より中央市場の円滑なる運営のために招かれたのである。

しかし、中央市場の場長になって見たものの全てが統制されていて、その物資の入荷が思うように行かなかった。当時、国民の間には「この

世では星と錨と顔と闇」と詠<sup>うた</sup>われて世相を皮肉っていた。顔のやくざと闇を操る影の人物が市場に横行していたのである。

正義感に燃えていた力蔵さんは見ようとするに危険を招くことになると、潔く職を辞めてしまったのである。それは昭和二十年四月のことであった。

丁度その頃から米軍のB29長距離爆撃機による空襲が熾烈になって来たので、昭和十九年十月に家族を一足先に清水村川西に疎開させたのであった。力蔵さんも川崎市の中央市場を辞めると、川西の家族の許に合流した。

此処で漸く、力蔵さんは昭和四年以来村を離れて十五年、流転と言ったのが良いのか、流離と言ったのが良いのか、その流れに終止符が打たれたのである。

私は此処でふと、島崎藤村の『椰子の実』の詩の三番の句を思い出したのである。

実をとりて胸にあつれば あらたなり流離の憂い  
海の日沈むを見れば たぎり落つ異郷の涙  
思いやる八重の潮路を いづれの日にか国に帰らん

やっぱり人は国に帰れるのだ。いやいや、人だから国に帰れるのだ。し

かし、人だからとて国に帰れぬ人も居る。

振り返ってみれば、その流転の最初は非常に惨めな生活を背けたくなり、目を覆いたくなる生活からスタートした。やがて力蔵さんの優れた才能と行政に対する卓越した手腕を発揮する場を与えて貰って、藤沢、小田原、藤沢、川崎と県内の自治体を幸せに巡ってきた。これはとりも直さず、ご本人の能力と人柄の然らしむるところであった。

さて、このきっかけはどのようにしてなのだろうか。

力蔵さんは清水村村長として、私財を投げ打って村の復興と発展のために県の役人と樽俎折衝してきた。そして県の役人からは常々非凡な人物と見られて居たのである。「細谷力蔵が失意の離村をして野に下り、今横浜で惨めな放浪の生活をしている……」と偶然にもうらぶれた力蔵さんの姿を見た県庁の人がこの情報を出した。この情報を聞いた心ある人が、動かされて救済の手を出してくれたのである。

これは確かに穿った見方であると思う。

## 五 プロフィール

『男は一度外へ出れば七人の敵を持つ』と言う。それ故に細谷力蔵さんは、外においては、修羅の如くなり全知全能を傾けて活躍し、正に

八面六臂の働きをしていたのである。しかし、その反面、家庭に入ると穏やかで良き亭主であり、優しい父親であった。

子供は女一人、男三人の子持ちであった。これからの時代は、子供には高度の教育を着けてやるべきだと言ひ、教育に目覚めて実践していたのである。

長女の幸子さんは、大正の末期に東京九段近くの或る裁縫の専門学校に入学し市内に下宿して学んでいた。その在学中のことである、両親と家族が峰から離れて、苦難の路を歩くと云う大きなハッピーニングが起きたが、本人はその苦勞を知らずに過ごした。それは、父親力蔵さんが学資一切を既に手配してあったので幸子さんは無事に卒業できたのである。幸子さんは卒業後、縁あって清水村用沢の山崎福之助氏と結婚し、主婦として内助の功を上げ、福之助は、神奈川県厚生課長、横浜職業安定所長などを歴任した。

長男の賢さんは学校の出来も良く、清水小学校六年から県立小田原中学校へ入学した。父親の力蔵さんは、賢さんを目に入れても痛くない程に可愛がっていて、将来を期待していた。そしてゆくゆくは医者にする積もりでいたようであったのである。

ところが中学二年の時、剣道の授業時間に足を滑らせて転倒し足を骨折してしまった。その怪我は大変難しい骨折で、直ぐに沼津の駿東病院

へ入院して治療に専念したが、跛を引くようになってしまつて、前途空しく中途退学せざるを得なくなつたのである。力蔵さんは賢さんが入院中、付き添つていて沼津の病院から村役場まで通う程であった。力蔵さんは、賢さんの行く末を案じ、将来写真家として生計を立てさせよう、昭和三年、東京の西山清と言ひ有名な写真家に弟子入りさせたのである。

昭和十六年に賢さんは藤沢市で開業し、戦後、山北の駅付近にスタジオを持って安定した営業をしていた。次男の俊夫さんは日産自動車に勤めていたが病を得て他界してしまつた。

三男の孝さんは歯科大学へ入学し苦学しながら勉学して卒業した。若いころは横浜市内で開業していたが、今では引退して御殿場市で悠々の生活を送つていられる。

力蔵さんは家庭では、何時もにこやかで、大きな声や鋭い言葉を使つた事はなかった。すなわち家族のものをはなつたことはなかったのである。

お酒は職務柄、外で飲む機会が多く、酒豪であったが、家庭では来客があれば別だが、晩酌はしなかった。品行方正で、接待の席、料亭で芸者を上げての遊びはあつても、羽目を外して、女と浮名を流すような不倫な行為は無かつたのである。

さて、力蔵さんの奥さん、きくよさんは、谷峨部落南の武尾家から、力蔵さんに嫁してきた。機知に富み、

熟慮断行する力蔵さんに連れ添つて、一度として泣き言を言う事もせず、愚痴も洩らさず、黙々と内助に尽くして来た。明治の女の真骨頂を発揮して来た人であった。そして、昭和五十一年二月に永眠されたのである。波瀾万丈の細谷力蔵さんの伴侶として、揺るぎなき陰の支えとして尽くしてきたその功績は、永遠に讃えられるものと確信するものである。

失意の中、村を離れる前に、お金を融通した峰部落の大家の細谷麟平さんや部落の人、そして身内の人が集まつて相談し「力蔵さんはいずれこの峰へ戻ってくるだろうから、土地の一部を残して置くべきだろう」と結論して話を力蔵さんに持ちかけたところ、終始むかつ腹をたてていた力蔵さんは、形相を変えて「もう二度とこんな所へ戻ってくるか……」と吐き捨てるように言つたとの事だつた。そこで細谷麟平さんが主導となつて負債の処理をしたのである。その結果、麟平さんと隣り合わせになっている力蔵さんの一等地は全部麟平さんの手中に収まつてしまつたのである。

戦後、細谷力蔵さんが再び清水村村長に返り咲いて、峰下の粗末な家に居ても麟平さんは峰の土地を削ろうと言わなかつた。そればかりでは無い。村の錚々たる人、また身内の中で社会に名を成した人が掛け合いに行つて「峰の元屋敷の土地だけで

も、時価で戻してくれまいか……」と申し込み、頼んだが、頑として首を縦に振らなかったとのことであった。この話を聞いた村の人達の間では、何の彼のと話題になったが、所詮、人の噂も七十五日と言うように消えてしまった。

私はある日真夜中、寝ている時のことであった。突然、耳元で誰かが喚びている、目を覚ますと、それは天の声か、人の囁きか……はっきり聞こえてきた。

「俺は力蔵さんの元屋敷をもどしてやるのには少しもやぶさかでは無い。村のために尽くしてきた人だからその功績としてね……。」

しかしだ、一度、峰を出て都会の生活をしてきた人は、二度と峰の生活には戻れないよ！。ましてだ、元屋敷だけでどうやって生活していくんだい……。

力蔵さん夫婦は、何とか峰の人に支えられて生きていける、子供や孫になったらやっていけないよ……。

その時にならまた手放す……。俺はそれは許せない。だから誰が何と言って来ても、どんな旨い話を持ってきても俺は返事をしなかった……。

峰の山は俺が守って行かなければならないのだ！」

それはまさに細谷麟平さんの声であった。そしてその声は、峰の山から大蔵野の山へ、それから谷峨の山へと伝っていったのである。果してこれは夢だったのか、幻想だったのか、今もって判らないのである。

六 結 び

昭和二十年八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾して、開闢以来味わったことのない無条件降伏をしたのである。そして米国が持ち込んだ民主主義は、台風の嵐の如く日本国中を吹き捲くた。何と言っても顕著な改革は、戦争に協力した人物の公職からの追放であり、続いて農地の開放であった。

昭和二十二年四月、清水村にも初の公選による村長が誕生した。それは「細谷力蔵」であった。勿論、村のこれと言う人は公職追放されていたから、すんなりと無投票で選ばれたのである。

早速、村長として最初に手掛けた仕事は、その時は既に単線になっていた御殿場線の谷峨信号所を、駅に格上げして旅客の取り扱いをさせたことであった。駅の開業は昭和二十二年七月であった。これにより当時の村民はどれだけ救われた事か計り知れなかった。初代の駅長は谷峨の人で武井熊吉さんであった。

次に手掛けたのは道路事情の改善であった。谷峨から山市場、神繩への道路は、川西橋が吊り橋で重量物の運搬にネックになっていたのを鉄橋に架け代えたことである。そして矢継ぎ早に、村道の改修を進めて、機械力の導入や自動車の乗り入れを図って、山道、農道の新設や改修を

推進したのである。

また、旧態依然だった小学校の木造校舎を鉄筋コンクリートに新築し、同時に中学校の校舎も近代的様式で新築したので、村は目を見張るよう明るく、活き活きとして来たのであった。

その頃、かつては政敵だった、谷峨の尾崎晁太さんとは和解していた。二人は互いに清水村を関東大地震からの被害から早く立ちなおして、村を豊かにしよう、目標は一つであった、互いに手法が違っても主張曲げず争ってきたのである。戦後いち早く過去の確執をかなぐり捨てて和解したのであった。

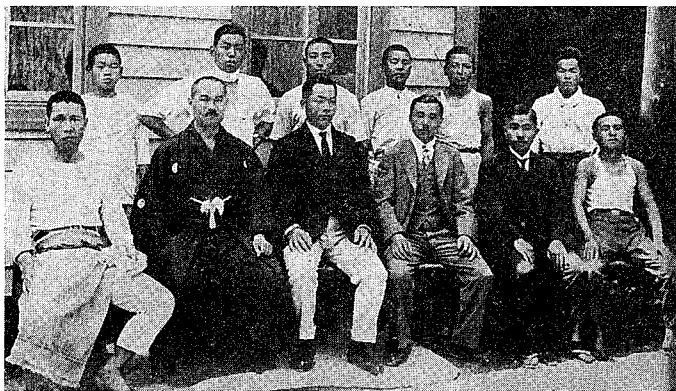
大正十四年、暗中模索するように採択した茶業を、足柄茶として村民が一体となって、生産増強と品質向上にひたむきに努力した。それぞれ農家は村の指導員の許に自己研鑽し、その実が上って、昭和三十年代の初期から、お茶の全国共進会に出品し、昭和三十五年には、その品評会に於いて全国第二位に入賞を果たしたのである。何をか言わん、細谷力蔵村長の巧みな指導と統率と、村民の弛まぬ研究心がこの賞を齎したのである。

さて、細谷力蔵さんは昭和三十年の町村合併促進法の制定に基づき、山北町、共和村、清水村、三保村と北足柄村平山が合併して出来た新生の山北町の助役に就任した。昭和三十四年二月山北町長関信夫氏が再選

されて、力蔵さんは七十歳になったのを機に助役を退任されて、以来一切の公職から身を引かれたのであった。

足柄茶の名声が高くなり、生産が挙がり収益が増加して、村民の生活が豊かになった。村民の中から「細谷村長の住居を何とかしようではないか、……。」と言う村長礼賛と感謝の声が出て、昭和三十四年ごろ古い材料で老夫婦が安穩に住める、こじんまりとした家を建てたのであった。

前列左より二番目細谷力蔵村長  
左隣は細谷麟平氏



清水村における第1回製茶講習会記念 昭和2年

昭和三十五年十月のことである。尾崎晁太さんが清水農業協同組合の組合長理事の時、細谷力蔵さんに左記の感謝状を贈っている。この感謝状を読むとき、既に共に老いた二人の間には何の蟠りの無いことが如実に示されていた。

### 感謝状

大正十二年の関東大地震は一瞬にして田畑山林を荒野と化し交通は杜絶し収入の途は閉ざされその惨状は言語に絶するものでした。当時の村長たりし貴殿にはこれが復興に全力を傾注せられしは言を俟たざる所ですが将来の村民の安定の為村民の経済の基盤たる産業の開発に特段の意を注がれ種々の産業を調査研究その結果茶葉の優秀なる事を察知せられ窮迫せる財政より茶業奨励のため多大の村費を支出し補助指導奨励育成に努められ今日の足柄銘茶の基礎を確立されました。その後幾多の変遷を経清水清香の名声は益々高揚の一途を辿りつつある事は一重に貴殿の深慮遠謀の愛郷の至誠の賜と存じます。茲に記念品を贈り感謝の意を表します。

昭和三十五年十月三十一日

清水農業協同組合

組合長理事 尾崎 晁太

細谷力蔵さんは昭和二十六年三月

清水村村長のとき、神奈川県町村会より地方行政功績者として感謝状を受けて以来、十指以上を数える表彰を受けている。なかんずく、昭和三十三年十月二十三日、地方自治功勞者として褒章条例により藍綬褒章を賜ったのは冠たるものであった。

このようにして、若くして清水村の村長になり、村の為に身代を潰して、失意の離村をして、波乱に富んだ人生のドラマを展開して、再び旧清水村の川西に戻り、戦後の清水村村長となり、村人の好意に支えられ、熱い感謝の声を聞きながら川西で余生を送ったと言う事は、男子の本懐で、こんな幸せなことは又と有ろうか。……聞いていても爽やかな気持ちになる。

力蔵さんは、病を得て昭和四十一年十二月三日、享年七十七歳をもって永眠、人生の幕を引かれたのである。

葬儀は旧清水村の人々により清水地区の地区葬として盛大に営まれた。力蔵さんが他界して遺骨は、先祖代々の峰の墓地に納められた。

しかし峰に墓地を持っているよりは、寺の墓地に墓を持つてゐることの方が、私の供養も行き届くと、ご子息の賢さんは考えられて、大蔵野の長光院の渡辺住職と相談して、墓地をもとめて、差し障りのない日を選んで、大掛かりではあったが移転を実施した。

かくして細谷力蔵家は峰から縁が

切れたのである。

さて、ここに改めて足柄茶の変遷と現状を見るとき、その発展に貢献をして来た人は数々在るが、先ず清水村に茶業を選択し、推進した人、そして、足柄茶を全国の茶業界のスターダムに押し上げた人は誰か。それは細谷力蔵さんを置いては他にない。

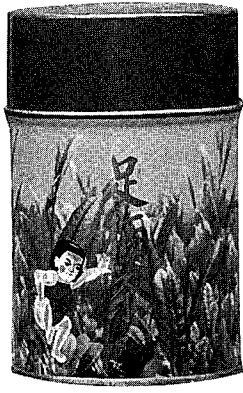
その基盤を引き継ぎ、高品位の足柄茶の量産に成功し、現在に仕上げた人。細谷麟平さんとその息子辰雄さんである。

そこに至るまでの過程に於いては、谷峨の藪田友好さん、透間の池谷公蔵さんの名前が挙げられる。ここで特筆する人物は嵐部落の藪田精一さんである。

茶畑に於ける生葉の量産技術が向上し、生葉の収穫が膨大になり、生葉の品質管理が問題になってきた。

藪田精一さんはいち早く、荒茶製造を各地域で実施する必要を説き、率先して嵐に荒茶の製茶工場を建設した。

そして、各地に続々と工場が出来



て、現在では県下に六十五の荒茶工場がある。茶業センターでは、大きな冷蔵倉庫を建てて、各地域から搬入される荒茶を収納し、逐次品質に細心の注意を払いつつ製茶の仕上げを実施している。最後の製茶の仕上げに当たっては、専門家によって製品を厳重に検査し、等級が決められる。

各生産者は等級によって収入金額が左右されるので、品質には真剣に取組んでいる。従って、県下の何処の地域でも、全部同じ品質になっているとのことだ。

足柄茶のトレードマークは、足柄山に因んで金太郎が登録されている。今でも町の何処かで見かけるであろうか、金太郎飴と言う棒状の飴がある。これは何処を切っても、寸分変わらない金太郎の顔が現れる。金太郎マークの足柄茶もそれに似て、神奈川県下の各生産地のお茶は、何処のお茶を飲んでも、色良し、香り佳し、味が好い上質のお茶である。このようなお茶が出来ることは、日頃から、生葉の生産から製茶の仕上げまで、一貫して管理体制が敷かれている事を忘れてはならない。

(了)

註 二ページ目のパンフレット表紙と七ページ目の写真は『足柄茶五十年史』より引用しました。(編者)



# 小田原叢談(三)

## 石井富之助

### 実業奨励会と二葉会

旧一丁田の辻村家を背景とした道徳教会とほとんど時を同じくして、明治四十二年に旧須藤町(銀座通り)の桔梗屋菓舗吉田義之氏を中心とする実業奨励会という会が生まれた。

吉田義之著『実業立憲篇』(明治四十三年十二月刊)という本がある。それには

小田原青年実業家諸氏は世界の大勢にかんがみて、ますます各自業務の発展を期し、報国の義務をつくしたいと昨年実業奨励会を組織した。そして、本年二月十日午後三時から、雨宮敬次郎氏を招待してその第二回を同地善光寺で開催し、引き続き同夜とその翌晩同じ場所で開催し、御幸座でも開催したと覚えていた。

としるされている。

桔梗屋の先祖は、貞享三年(一六八六)大久保忠朝が千葉県佐倉からふたたび小田原藩主として帰って来た時、いっしょに随って来た医師だといわれているが、父義方氏は小田原町長、義之氏自身は県議員として、小田原の政財界に重きをなしていた。

雇人奨励会——後に店員徒弟奨励会と改称したと記憶しているが——は、だいたい、小学校の優等生の国歌斉唱にはじまり、教育勅語、戊申詔書の奉読、講演、優良店員の表彰、余興として音楽剣舞、眞龍斎貞水の講演、最後に福引があつて散会というものであった。はじめのころは善光寺を会場としていたが、後には富貴座に移り、御幸座でも開催したと覚えていた。

わたしは、優等生だったので毎年呼ばれて君が代を歌わされたが、大人の会だからちっともおもしろくない、最後の福引を楽しみにしていたものであった。

経費はすべて寄付金によってまかなわれていて、第二回の奨励会には百八十五円八十銭を集めている。道徳教会にしても、この雇人奨励会にしても、まったく民間の事業として行われており、町から一銭の補助も受けていない。この辺、今の社会教育とだいぶ違ったものが感じられるのである。

その設立者の一人として努力し、五月十一日初代校長に就任していることである。私事にわたるが、わたしの祖父伊兵衛は道徳教会の理事であつたが、父定吉(當時は太平といつた)は実業奨励会の方の有力メンバーであつた。

実業奨励会はもう一つ小田原二葉会という会を持っていた。

これは、学校教育がいかに発展しても家庭及び社会がこれを破壊するようなことがあつてはならないという考え方から、現在の家庭教育、社会教育の立場から子供の教育を援助しようという目的で結成された会である。



カット 内田 美枝子

最初は善光寺、後に富貴座、御幸座を会場としたことは奨励会と同じであつた。毎年第一、第二、第三小学校の生徒全員を招待して、優良児童の表彰、講演

それに巖谷小波のおとぎばなしという会であつた。

これもわたしに事になって恐縮だが、昭和の始めごろだったと思う。大学の休暇で家へ帰ってくると、ちょうど二葉会の企画をしている時だった。今年も例年のとおり巖谷小波だといふ。お礼はいくらかかると聞いたら百円だといふのでびっくりした。午前一回、午後一回、つごう三回話してもらつたのだが、これは最高といつてよい謝礼である。ラジオ放送開始以来、新進童話家がたくさんでている。そういう人を頼んだら、話も新鮮だし、謝礼も安くてすむだろうといつたら、それでは君に一任するから誰かいい人を探ってきてくれということになつてしまった。

物いえばくちびる寒しで、とんだことを引き受けさせられて困つたが、芝の柴井町で洋反物商をやつながら、少年団長をやつたり漫画をかいたりしていた義理の兄に相談したら、それなら時事新報の北沢楽天氏を通じて、当時『少年』『少女』という雑誌の編集長をやつていた童話家安倍季雄氏に紹介してもらおうといふこ

とになった。  
事はうまく運んで安倍さんに会うことができた。

「あなたはいいいところにきました。今日愛宕小学校で八人の先生が童話をやります。そのどの人でもいい、わたしがそういったとお頼みなさい。」

と安倍さんはいった。  
さっそく愛宕小学校にかけつけて、みごとに一人の先生をつかまえた。たしか内山憲尚氏(当時は憲堂といた)で、謝礼は三十円

『小田原史談』に、わたしの丹沢の植物などという原稿は場ちがいではないかと案じながらも、縁があって貴重な頁を埋めさせて頂いております。そんなことからこの誌上で石井富之助さんの「小田原叢談」を讀ませて頂く機会ができました。そして、石井さんが四月にご逝去されたことも誌上で存じあげた次第です。  
話は二十年前にさかのぼりますが、当時わたしは、高校教育現場におり、海外事情視察のため南米、カナ

でいいということだった。後に日本童話家協会の会長になった人だけあって、話はずまく、たいへんな好評で、わたしは大いに面目を

ほどこした。二葉会がいつまで続いたか、それはわたしにも覚えがない。(続)  
(お詫び)前号の「石井富之助さんのご逝去を悼む」で、逝去された日を四月十三日とすべきところ、誤って四月十七日としてしまいました。ここに謹んで訂正申しあげます。

(編者)

### 奇縁の体験 城川四郎

ダに一カ月余り出張したことがありました。各地で日系移住者の方々に大変ご迷惑をおかけした。特にカナダのバンクーバーで井上清治・徳子さんご夫妻にお世話になったことが強く印象に残っております。  
今年六月に、バンクーバーも予定コースにはいっていないカナダのツアーに参加することにになり、出発前に二十年間すっかりご無沙汰申し上げていた井上さんご夫妻あてにお手紙をさしあげておいたところ、ホテルに

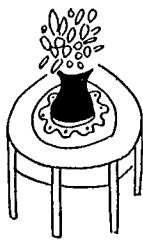
## “さるやかど”の

### お稲荷さん

#### 南里 哲

旧地名の山王原を、東町(小田原市)一丁目と三丁目とに分ける道が通じている。車一台通りぬけられる幅員である。昔は、今井(寿町)に至る田圃道で、年輩の土地っ子は今井道といった呼び方をする。  
その道を、国道一号線か

井上徳子さんからお電話を頂きました。ご主人は六年前に八十六歳で他界されたとのことでしたが、この電話で、『小田原史談』の話がでてびっくりしたのです。なんと、井上徳子さんは、石井富之助さんの実妹でいらっしゃるとのことでした。若々しいお声で、お話し下さる内容も、生活に張りをもっていらっしやるご様子うかがえるものであったことも添えさせて頂きます。



ら入った直ぐの、“さるやかど”と呼ばれる場所に、小さなお稲荷さん(写真)が祀られている。

土地の人は、“さるやかど”の意味が分からないという。“かど”は角であるうか?すると、“さるやか”は、人名か、つい愚にもつかぬ地名を連想してみるが、地名の由来は、考える人の数だけあると言っても過言ではない、例外はあるにしても。

いっそのこと、その無名のお稲荷さんを、「さるやかど稲荷」と呼んだら、と勝手な事を考えてしまう。

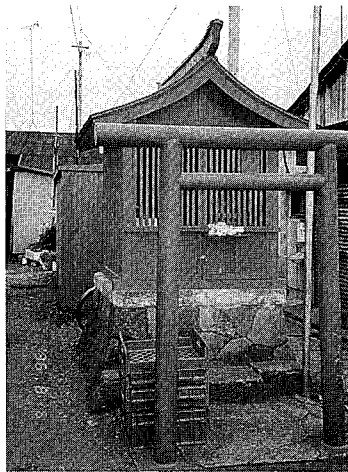
ともかく、何時、誰が、何処から勧請したか分からないお稲荷さんの方に、関心によせられる。それも、一月十四日、さいの神さんのとき、木で出

来たお稲荷さんの祠が、女の子の手で、覆堂から持ち出され、祀られるという。その由来は、山王原には道祖神が七カ所もある。だが、男の子だけの祭りでも、それでは、女の子が、遊び場がなくて可愛相だと、昔、漁師の人が、そう決めたものだ、と言う。

宿は順廻りだったが、現在、その祠を子供会で借り出し、小学校六年生以下の子供が、それを祀る。場所は、近くの農協の支店が利用されるらしい。

いつ頃からの習わしか分からないが、稲荷と塞の神とが習合した形と云えよう。庶民の思いがこもった二つの信仰の習合には、ほほえましいと言いか好ましいというか、ともかく親しみを感ずるものがある。

“さるやかど”の稲荷社



# ソ連軍の侵攻

東満  
国境

## 小豆山の死闘 (1)

松本 茂雄

勤労働員先に届いた  
召集令状

国内の決戦態勢は急速に  
推し進められていた。

昭和十九年一月、政府は  
緊急学徒動員方策要綱を決定、私は、横浜市の昭和電  
工鶴見工場に動員された。

四月、徴兵検査を東京都  
牛込区役所に於て受けた。  
本来ならば、本籍の福島市  
で受けるのであるが、下宿  
先を現住所にして、寄留届  
を牛込区役所に出していた  
関係からである。結果は、  
第三乙種合格となり、いつ  
かは入隊しなければならな  
かった。不合格でない限り、  
全員が陸海軍の軍務に服さ  
なければならぬ。

理科系学徒の一部には、  
兵役や勤労働員から除外さ  
れる特典があった。しかし、  
文系の早稲田高等学院学生  
である我々には、学徒徴兵  
猶予は停止されたのであっ  
た。

級友は、続々と海軍の予  
備学生に志願し、入隊して  
いった。

八月十四日のことである。  
私は、東部軍経理部に出頭

せよとの通知を受けた。私  
は、同経理部が直轄する千  
葉県印旛飛行場建設現場へ  
連れて行かれた。

其処には、朝鮮人労働者  
二、三千名と、近村の老人  
と女性のみで勤労働奉公隊数  
百名が、戦闘機の掩体(えんたい)を多  
数構築中であつた。敵機か  
らの攻撃を防禦するもので  
あつた。外に、土木業者な  
どが滑走路に偽装用に芝を  
張つていた。

私の仕事は、それらの現  
場と事務所の間の連絡や報  
告をするのが役目であつた。  
建設責任者は、兩宮建技中  
尉と高橋少尉である。

動員されたのは、早稲田  
の同好会自動車部員三名、  
東京帝大土木科三名、日大  
土木科五名計十一名の学生  
で、飛行場の側にある生大

師の庫裡(くら)を宿舍とした。薄  
気味悪い古寺での合宿であつ  
た。

翌昭和二十年二月十五日  
の朝のことであつた。飛行  
場の一番遠くの片隅で、ロー  
ド・ローラー(敵性語排撃  
で和名が用いられたと思うが  
失念)の作業を見守つてい  
た私は、ふと遠くから走つ  
て来る友人の姿に気付いた。  
その瞬間、

「いよいよ来たな」  
と悟つた。召集令状が来  
たのである。

その時のことを、今でも  
よく覚えてる。遂に来る  
ものが来た、と、覚悟をし  
た。

入隊先が不明のままに

入隊迄十日ばかりあつた。  
取り敢えず東京に戻り、下  
宿を引き払い、慌ただしく  
郷里福島市に帰つた。

合状は、「二月二十五日  
正午、郡山駅前ニ集合セヨ」  
との内容であつた。兵科は  
迫撃兵とあるのみで、行先  
は、全く記されていなかっ  
た。

迫撃兵とは何んだらう?  
何処の部隊へ入隊するのだ  
らう?  
入隊先が、九州か、それ

とも四国なのか、或いは南  
方に送られるのか気掛かり  
であつたが、家族にとつて  
は、非常に不安であつたよ  
うだ。

郡山駅に集合したのは、  
約三十名、既に仙台駅で乗  
車したのと、新潟駅で新た  
に加わつた者とを併せて約  
百名ぐらゐの集団となつて  
いた。

この日の夜遅く、列車は、  
遅れてやっと上野に着いた。  
東京が空襲され大きな被害  
を受けたためだ。

上野駅南口に立つと、あ  
たり一帯、焼野原となつて  
いた。前に時々来たことの  
あるこの街は、鉄筋の建物  
の残骸が二つポツンと残る  
だけで、廃墟と化していた。

我われ一行は、歩いて東  
京駅迄移動したが、その間  
焼け落ちた家屋の間で、ガ  
ス管からチョロチョロと火  
が吹き出し、残り火が顔に  
は照つて熱かつた。  
翌朝、東海道線で関西方  
面へ向かう。

渡満と初めて知らされて  
二月二十七日午前三時、  
大阪着。御堂筋の梅田と難  
波の丁度中間あたりの裏手

にある後藤旅館という小さ  
な宿に入った。

ここで、我々の引率責任  
者は、嶋田中尉であること  
が分かつた。だが、直屬の  
中隊長となる人だとは、少  
しも知らなかつた。付き添  
いの下士官から極光という  
満洲の煙草が配給され、満  
洲に派遣されるのを始めて  
伝えられた。

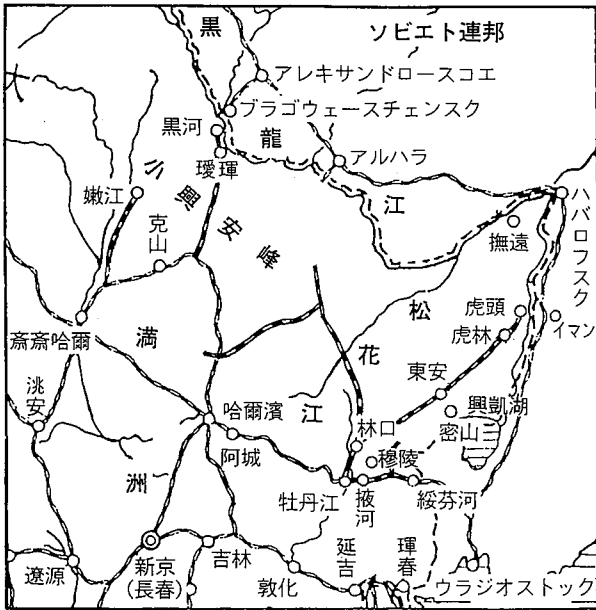
この日の午後、旅館近く  
の大阪市東区役所(当時)  
のコンクリート三階建の屋  
上に集められ、憲兵数名の  
警戒の中で、学生服を脱ぎ  
軍服に着換えた。

私は、なんとかして、  
「満洲へ行く」ことを家族  
に知らせねば、と思つてい  
た。

今が最後のチャンスであ  
る。

便所に行きたいと言つて、  
その中で、前夜便箋一枚に  
書いた手紙「満洲へ」と記し  
を、学生服の上衣の裏地を  
破り、こっそり中に隠して、  
そのまま梱包し、他の者と  
同じように故郷へ送り返し  
た。

手紙には次のように書い  
た。  
お蔭様で無事にここ迄



辿りつきました。大阪には二日間おり、身体検査や結団式を行い軍服姿になります。追撃兵というのは、最近の兵科で、近代化学戦に関する任務に就くようですが、その内容は判りません。現在のところ全く何も心配いりません。私も大元氣です。では、みんなも、お元氣で

さようなら

話は、あと先になるが、実家に届いた私の服を調べていた姉は、その手紙を発した時の驚きを、日記に書き記している。

大阪より送り返された洋服から、この便りの見つかった時の嬉しき。晴やかなこの日こぼるる涙かな

きよらけき瞳なりけりいとほしの弟 今日ぞ召されて征さぬ

支給されたのは、略帽、

冬衣袴、冬外套、軍靴、雑囊、水筒など、陸軍で被服と総称されたものだけだった。兵器の銃と帯剣は支給されず、襟につける赤い階級章には、星ひとつ着いていないので、まるで、民間の青年団員のような出で立ちだった。

二十八日は、その姿で、大阪御堂筋の中程にある東本願寺津村別院の前庭に集合。他の渡満部隊の者たちと一緒に、その数、数百名と同じ輸送船に乗り込むのであろう。その輸送指揮官と覚わしき将校より訓示があった。

三月一日未明、軍用列車で大阪を出発。

三日、夜陰に乗じて博多港を出航した。船上では敵潜水艦の攻撃を想定した訓練もあった。船の揺れは大きく、便所の汚物が流れ出していた。

同日未明、釜山に上陸、釜山駅構内にある門玄哨舎に入り休養。

四日 釜山を出発。途中停車場司令部のある駅で何か停車、その度に弁当が運び込まれる、といっても「使役に出ろ」という付添下士官の命令により、我わ

れが交替で弁当の受領に出た。

弁当の内容は、内地での食事より、量・質とも優っていた。赤い蕪の煮付けが添えられていて、内地にはない食べ物であったので、強い印象が残っている。内地では、毎日がひもじい思いの連続であったのに、それは贅沢なものであった。

車中、中学一年先輩の高木薫さんと同期の原百七君と同席だった。

原君は、私に歌を教えてください。

古き花園の庭  
思ひ出のかずかずよ  
雨は今日も降る  
……………

北朝鮮廻りで満州に入った。すると、引率の下士官から、駐屯地が、東満国境近くの虎林であると知らされた。

虎林がどのような処か、想像しても仕方がない。個人ではどうにもならない、大きな力に引かれて、何処迄も流されて行くような感じであった。

虎林に着いたのは、故国

を立てて七日目の、三月十日の夜。外は吹雪だった。部隊から車輛で迎えに来てくれた。

この車輛は、後で知ったことだが、荷台に、迫撃砲一門と一箇分隊の兵員を載せるトラックで、兵器としての取り扱いであった。

零下三十度の寒さだという。外套の頭巾をすっぽり被り、風を避けて仲間とわずくまった。その上から大きな幌(シート)を被せられた。

駐屯地までの乗車時間は、とても長く、やっと兵舎に辿りついた感じだった。しかし、実際は、七、八分の時間だったらしい。

屋根の明り窓の処まで土で覆い被せられた木造兵舎に入ると、ポーツと暖かった。通路の真中に置かれた長方形の煉瓦で作られた暖炉が燃えさかっていた。初めて見るペーチカというものだった。

私が入隊したのは、関東軍第五軍第十一師団に直属の迫撃第十三大隊である。私は、第二中隊に配属された。

高台に上がると、遠くにソ連領を見渡すことが出来

た。ここで、三カ月、第一期の初年兵教育を受けることになる。

初年兵教育を受ける

私は砲手として、九七式軽迫撃砲の取り扱いの訓練を受けた。

教官は山田栄一少尉、助教に橋本臣司軍曹、助手は大内兵長であった。

橋本軍曹は、横浜出身で下士候志願でなしに、現役入営で、下士官に任官する程で、細かい処まで気配りをする、優れた資質の方であったが、残念ながら、小豆山の戦闘以降行方不明となった。恐らく戦死されたのであろう。

- 本砲八間接照準ニ依リ有翼彈射撃ヲ特性トスル前装式火砲ニシテ、運搬ハ自動車車載ヲ本旨トシ要スレハ輜重車又ハ駄載ヲナスモノトス(昭和17年6月「九七式軽迫撃砲説明書」(総則))
- 九七式軽迫撃砲諸元
- 砲身長一・三 m 口径九・〇五 cm 重量三五・五 kg 弾量(榴弾)五・二六 kg 最大射程三八〇〇 m 床板(甲)四二 kg

(乙) 六七 kg 脚高低射界四五〜八五度 昭和13年3月試製完了 昭和15年6月制定(出版協同社『日本の大砲』)

初年兵教育は、営庭で受けることが多かったが、床板や砲身を担いで走るのには本当に辛かった。それと苦しかったのは、飯を早食いしなければならぬことであつた。食いが遅いと言つてよく怒鳴られた。

新潟の国鉄(?)出身だつたと云う武田上等兵は、ある時、私を裏の物置の中に入れて、殴る蹴るの制裁だけでなく、標棒で脳天をカンカン叩きつけ、銃の床板で力一杯胸を突いた。引つ繰り返つた私は、起き上ることも出来なかつた。その上等兵は、他へ転属して仕舞つたので、その後どうなつたか今もって分からない。それでも裏山の征胡台に演習に出ると、春先の迎春花が可憐な花を咲かせて、私たちを慰めた。小休止になると、その花びらにそつと頬よせたものである。五月になつて、初めて内地に便りを出すことが許さ

れた。実家に届いたのは、五月二十五日であつた。上の姉は、日記にこう記している。

はろばると はろばると来ぬれ 初便り

おもてみつ うらみても悲し 初便り

葉書には、「元気に軍務に服しております。ご安心下さい」などと記すだけである。勿論、駐屯地と固有

の部隊名は書けない。満洲第八六〇軍事郵便所気付満洲第三一〇七部隊山田隊と記すだけである。

私は、どうしても虎林にいたことを知らせたいと、思い考えた末、以前、私の実家で書生をしていた山本さんにも、

「以前、山本さんが居たのは此のあたりかと、車窓から外の景色を見ながら此処に来ました」と、便りをした。山本

さんは、昭和十四、五年頃に会津若松の歩兵連隊に所属し、一年ほど牡丹江に行つたことがあつた。

山本さんは、葉書を受け取ると、父の処に飛んで来

て、「大変だ、牡丹江の先へ行った国境らしい」と、皆んなと話しあい、満洲の東北部に居ることを家族は知つたという。

話は、先になるが

それだけに、八月十五日の新聞の一面では、終戦の詔書が載せ、裏面には、ソ連軍が綏芬河、穆稜から牡丹江に侵入し、目下激戦が行われている、と報じた。実家の心配は、大変なものだつたと言う。

国境の大湿地帯で

六月初旬、私達は、興凱湖畔の国境警備についた。あたり一帯は、殆どが大湿地帯であつた。

古年次兵の話によれば、昭和十七年の夏、この大湿地帯で、師団ないし方面軍単位の、規模は正確な事は分からないが、ともかく大規模な湿地演習が一ヶ月も続けて行われたという。

演習は、日中は、湿地に穴を掘り偽装網を被りじつとして隠れ、日の暮れるのを待ち、湿地帯を流れる河をソ連との国境と見立て、真つ暗の中を隠密裡に渡河するものだらう。迫撃砲は、砲身、床板、

脚に分けて肩に担う分解搬送で、湿地には悩まされたという。底無しの湿地に沈み行方不明者を出した部隊もあつたと、聞いている。

大隊の主力は、既に昭和十九年七月、虎林より興凱湖近くの密山県大橋地区に移駐、太刀花隊と称して、太刀花地区と呼んだこの地域の警備に当たつていたという。

地区には、四カ所の監視哨が置かれ、いずれも一個小隊約三十名が駐屯していた。

ソ連領迄八百m、場所によつては百mぐらいしかなかった。そこに立てられた高さ十五mほどの望楼から、昼夜を分かたず高性能の望遠鏡で十km先のシベリヤ鉄道ウスリー線の動きを監視し、その状況を防諜名の「北山」にある本隊に報告するのであつた。

当時、ヨーロッパ戦線では、四月三十日にヒットラーが自殺し、五月七日、ドイツは無条件降伏をしていた。ヨーロッパ戦線が終結したソ連は、全力を挙げて戦車、砲、兵員などを極東に移動し始めたのである。(続)

## 生かされて

## 私の軍隊体験(5)

磯部正人

(前号まで)昭和十六年一月、現役兵として、甲府・歩兵第四十聯隊に入営。一週間後、満洲・ハルピン・歩兵第三十聯隊要員として渡満。翌十七年三月、新設の迫撃第十三大隊に転属。虎林に駐屯。入隊以来四年有余の在満で、ことよつたら内地へ帰還できるかも知れないと、転属希望を申し出たところ、昭和二十年五月、新編成の野砲兵第二百二十四聯隊に転属。八月九日、突如ソ連軍の侵攻。東満・掖河陣地にて、中隊に僅か迫撃砲一門と三八式歩兵銃二十挺と、各自手榴弾二個戦車地雷一個の装備で、牡丹江防衛のため布陣。

## 運命の日

八月十三日昼前でした。敵戦車が、五、六輛で市街地から当方陣地の方へ進攻して来るのが、肉眼でもはっきりと見えます。

射撃準備を始めます。一方砲関係以外の兵と指揮班は、敵に面した斜面に蛸つぼを掘って、その中に入り対峙して居ります。

敵戦車がいよいよ八百米位に近づきました。

迫撃砲も小銃も射撃開始しかながら敵戦車に当りません。近くに着弾するの

れと云ったが散らなかつたばかりに、不幸にも直撃弾を喰い、穴の中にも附近にも肉片すら残さず二人一緒に壮烈な戦死を遂げてしまいました。まことに気の毒でした。

戦車の方に目を移すと、道路わきに蛸つぼを掘って中に入って居た特幹の若い兵士たちが、戦車が近づくと壕から跳び出して突っこんで行くのが見えます。

恐らく戦車地雷を抱いて特攻でしょう。成功すればキャタビラが破壊されるので前進を妨げることが出来ます。

もうこの頃になると、状況は混沌として何が何だか判らない状態です。迫撃砲の発射音も聞えない。様子を見に行つて見ますと、砲身が焼け使いものにならな

いとのこと。また、元の位置に帰ろうと遮蔽物を利用しながら、移動中に仰向けになって戦死していた兵の小銃を取って敵戦車めがけて射ちました。小銃弾と戦車じゃ戦になりませんが、どうせ玉碎なら一発残らず撃つて死のうと思つたのでした。夕方近くになって来ました。

まだ昼飯は食べておりませんが空腹は覚えません。生き残っている者は皆同じでしょう。だんだんと戦況が悪くなって参ります。第二大隊の野砲陣地も直撃弾を喰い、陣地は吹っ飛んでいるのが見えます。いよいよ残つて居る者だけで薄暮の斬り込みだろう。これで俺の一生は終わりか、二十四歳を一期として、故里遠く離れた東満の地に骨をさらすのか等々瞬時の内に、いろいろの想いがかけめぐりました。

そのうちに中隊長が軍刀を引き抜き、「部隊は今薄暮を利用して敵戦車群に突入する。各自直ちに水杯を取れ」の号令が下る。(万事終りだな)

隣の戦友と水筒の蓋で杯を交し、不必要な物はその場に捨て、雑糞に手榴弾二筒、戦車地雷一筒を入れた軽装となって、出撃の命令を待つ。色々なことが頭の中を駆け巡る。ついさっきまでは考える余裕もなく、半狂乱になっていたのに。死にたくないなあ。でも、もう逃れられない。もうすぐ死ななければならぬのだ。

生きのびる余地は全くない。味方からの砲声銃声は全くない。静かな静かな一刻。敵戦車も砲撃を止めたらしい。敵が市街地の方へ後退して行く。どうしたのか。薄暮がせまり日本軍の決死の夜襲を恐れたのだろうか。多分そうかも知れない。

日が暮れて又命令が下つた。「夜陰を利用して転進」いわゆる退却だな。

しかし、今死ぬことはのがれた。生き残つた兵が山の後に集結して移動を始めた。まわりの山の頂上あたりで敵の信号弾が夜空に上る。何の連絡をしているのだろうか。死を逃れると又普通の弱い人間に戻つてしまい、夜行軍をしながらも余り気持ちの良いものではない。不思議なもので、昼の戦闘中とは打つて変り、一種の不安が頭の中をよぎる。油断することなく色々な憶いと心の中で闘いながら牡丹江方面に向かって夜行軍は続く。

随分歩いたなと思つた頃「停止」「現地附近にて明朝敵戦車の進攻を待ち肉迫撃を行う。戦車地雷を抱いてしばし仮眠せよ」の命令

が下る。鉄帽を頭にかぶったままで仰向けになり、漸く暫しの眠りに就く。今度こそ最後だ。もうのがれられないと思いがら……。

朝、目覚めてみれば、又転進命令。行軍しては停り、戦闘態勢に入りの繰り返しで何日位経ったであろうか。昼の行軍中にはソ聯戦闘機の機銃掃射を受けます。日本軍の飛行機は、何処へ逃げたのやら、後日、武装解除されるまで到頭一機も姿



近頃、召集令状のことで気になる文章に出会った。さる出版社のPR雑誌に載っていた「死語をほりおこす」がそれだ。

……召集令状は直接本人の家へ配達されることは少なく、まず、「令状を取りに来い」という書が届き、それを持って本人が役所に出頭する。すると係の者がピンクの令状を手渡し、その時「おめでとうございます」と

を見せませんでした。だから敵機は、自由に飛び回り、日本軍を見れば容赦なく機銃掃射をして来るのです。日中は、敵機の進行方向と下降角度をにらみながら攻撃から逃れます。夕方になると、機銃弾に曳光弾が入っているのです、どちらに弾が来るか判ります。昼でも夕方でも、咄嗟の判断で素早く身をかわせば、身を護ることが出来たのでした。

言うのが決まりになっていたという。これは「お国のお役に立てておめでたい」という意味だったようである。

召集令状が、直接本人の許へ配達されることは、少なかった、とは、ちょっと首を傾げたくなる。ほんとうにあり得た事なのだろうか？ 私の知る範囲では、そのようなことは無かった。もし、あり得たとすれば、戦争末期で、直接、召集令状を渡すことが出来なかった変則的な措置ではなからうか……。

召集令状に関連して思い出されるのは、市役所や町

また、小型の爆弾も投下して行きますが、これは弾道がよく見えますし、落下速度も機銃弾に比較して遙か遅いので逃げ易く、弾道より左右どちらかに避難して伏せて居れば大抵の場合安全でした。

でも逃げ遅れた兵や馬車が沢山犠牲になりました。道路上で或いは畑で或いは原野で。

こうした人達を收容し埋葬することも不可能でした。

村役場に必ず置かれていた兵事係のことである。その役割について、辞典は、「もと、役所などで兵事を担当する係」と、記す程度で、百科辞典にも載っていない。

都道府県史や市町村史の近代史編に、兵事係に関する資料を収めた例は、まず無いといつてよいだろう。

敗戦時、市町村では、上部の指令により、兵事関係の書類は、一切焼却されたという。それが原因で、都道府県史や市町村史に、徴兵、入営・充員補充などの事務を扱った兵事係についての資料や、その解説が欠落しているのであろう。

陣地戦闘の時もそうでした。負け戦と云うものは悲惨です。指揮官以下心の余裕もありません。

ただ転進に次ぐ転進で、何処で態勢を立て直すかも考えられないような状態でした。

そんな中では人間は自分の安全だけしか考えないのでしょうか。上官も下級の兵士も皆退却の流れに従って黙々と足を運ぶだけ。敵機の爆音が聞こえれば、命を落とさぬように逃げるだけ。運悪く戦死された人の髪の毛一本さえ持つて行くことも出来ない情けなさ。敗け戦さは、人の心を全く

ところが、兵事に関する書類を焼却せずに、こっそり保管されてきた人がいた。富山県東礪波郡庄下村(礪波市)の兵事係の方である。よくぞ今迄、兵事係の書類を保存されて来たという思いがある。希有のことである。それを知ったのは、去る、八月十一日(日)夜、放映されたNHKスペシャルを見たときである。

題して「赤紙が来た村・誰がなぜ戦場に送られたのか」―召集令状二四六枚の

味気ない非情な心にするものですね。

その日八月十七日の午後も夕方近く、牡丹江市の約五十キロ西の横道河子山に立てこもり、ソ聯軍を迎え撃つといふことで山に入りましたが、もう昔の関東軍ではなく烏合の衆に近い状態でした。心の中でもこんな武器一僅かばかりの小銃と手榴弾と戦車地雷では、敵の近代化された軍隊と対等に戦えるだろうかとの危惧で一杯でした。そうこうして居る中に、どうも日本は戦争に敗けたらしいと云う噂が口こみで伝わって参りました。(続)

徹底調査。ご覧になった方が多いと思う、少なくとも青春を戦火の中に没入を余儀なくされた世代にとっては、他人事ではなかったかと思われる。

放映の内容は、当然、個々の人の軍歴に焦点が当てられたが、軍の動員命令が、地区連隊区司令部を通じて市町村の兵事係に伝えられる方法や、それに関する資料を知りたい、と思うのも戦争世代に属するからであらうか。(岡部忠夫)

## 赤い夕日が沈む 前編(1)

## 私のシベリア抑留生活

木曾 正雄

控え目の木曾さんは、初めは公表される考えはなく、身内のためにと記録を残されていた。が、本誌一六五号掲載の青木友吉さんに関する記事を読み、この度ここに発表される気持ちになられた。

## はじめに

平成七年(一九九五)は第二次世界大戦終戦五〇年にあたり、戦時中の戦争経験や、物心両面の悲惨な生活を経験した人達は高齢となり、生存者も少なくなつて、当時の模様を語り伝えないと忘れられてしまう。

私も八十歳を過ぎ長い人生のうち軍隊生活と捕虜生活は最も痛ましい期間で、書き残したくないが、平和の世の中が如何に大切であるかを後代に知らせたいため、あえて記録に残す次第である。

終戦前のわが国は国民皆兵で、男子は、大学に在学中とか特別の事由がないか

ぎり、二十歳になつた年に徴兵検査を忌避することは出来なかつた。

私は、昭和九年(一九三四)大学に在学中で、徴兵検査延期を申請することが出来たが、あえて延期しないで受けた結果、第二乙種第一補充兵となつた。当時、甲種合格は翌年入営し、乙種丙種は戦時中召集されることがあり、丁種は不合格で翌年再検査されるか、身体障害等のため兵役免除となつた。

## 一 入隊

昭和十八年三月十八日午後一時三十分頃、机上のベルが鳴って、交換手が小田原からお電話ですと伝えた。

今まで小田原から会社へ電話がかかってくるのがなかったの、不吉な予感があった。義兄の声だった。

「とうとう赤紙が(召集令状)が来たよ」

一瞬血の気が、すうっと引いた感覚だ。何時くるか何時くるかと不安の内に結婚を引き延ばしていたのに、運命の皮肉か新婚一カ月にして召集令状がこようとは……。

緒戦では戦果が華々しく発表されたが、六カ月後の昭和十七年六月、ミッドウェイ海戦で敗退。国民にはその事をひた隠しするなか、制空権を握られた日本軍は次第に守勢に立ち、十八年二月にはガタルカナル島を撤退開始、戦局は、日に日に不利となり、同じ頃、レニングラードの攻防戦で同盟国ドイツ軍は、ソ連軍に敗退する事態となつた。そんな頃、令状が舞い込んだのである。

三月二十三日、麻布の東部第七部隊(近衛歩兵第四連隊)に入隊することとなつ

た。

私の会社は、「日本電信電話工事株式会社」といい、昭和十一年設立の国策会社で、東京芝浦に本社があり、内地には、大阪支店が、外地には満洲に新京支店、中国には北京支店と上海支店、蒙古には張家口支店があった。私は、本社の会計課に勤務していたので、これから年度末の決算期を迎える直前の繁忙期であった。

国策会社 国家の政策を遂行する目的で設立された半官半民の会社。数社による競争を排して一社に統一、物資の生産・流通を統制して合理化を計るのが狙いで、わが国では第二次世界大戦前後の戦時統制経済下において数多く設立された。

その日、五反田の妻に電話するやら、仕事の引き継ぎ、不在中の連絡方法、私物の取りまとめやらで、午後の半日は瞬く間に過ぎ、自宅に帰った時は日もとっぷり暮れていた。いつも笑顔で迎えてくれた妻の顔は憂いに沈んでいた。独身のときは、何処へ行

こうと身軽であったが、新婚とはいえ、一家の主となれば、近所にも知らせなければならず、入隊後の妻のことも頼んでおかなければならない。

夜中になつても眠るどころか、話し合うでもなく、差し向いになつたまま、まんじりともしない。一夜は明け、二人で一先ず小田原に行くこととした。

十九日、小田原の実家に戻ったが、目の不自由な母の世話になるのは気の毒と思ひ、姉の家に寝泊りすることになった。小田原でも多忙をきわめ、親戚・知人・町内の挨拶廻り、武運長久の祈願やらで、またたく間に三日は過ぎ、入隊前日夜二人で帰京した。

二十三日、いよいよ今日入隊とて、早朝に食事を済ませたところに、小田原から父が、蒲田から兄が来た。やがて会社の上司、同僚、アパートの方々が来られ、歓送のうちに出発し、集合場所に指定された明治神宮外苑に八時前に到着すると、既に小田原から姉、光雄兄夫婦も来ていた。やがて召集兵は集合が掛けられ、召集令状を渡し、





奉公袋を手に

小田原の実家で



隊伍を整えて近衛歩兵第四連隊の営門をくぐる。

営庭に待ち受けた係の兵より、軍服、軍帽、軍靴、襦袢(シャツ)、袴下(ズボン下)、靴下等が支給され、直ちに服を着替えて私物は全部風呂敷につつみ、再び営門を出て、外苑球場に行き、風呂敷包を渡して家族と決別した。

軍服を着た以上もう軍人で、厳しい軍紀に従わなければならぬ。

昼は古兵の盛り付けの麦飯に、質素な副食を食べたが、大部分の者が食べ残し

た。

へ金のお碗に金の箸  
お釈迦様ではあるまいに  
一膳飯とは情けなや

夕食時となるとさあ大変

入隊したばかりで一同もたもたしていたら、

「お前達！ いつまでもお客さんじゃないぞ」

と、目の前に食事が並んでいるのに、大声で長々と古兵のお説教である。

夜の点呼が終わると、又々

「初年兵集合」と集合がかり、再び長いお説教があり、消灯ラッパの後しばらくして就寝許可が出た。

此処の兵舎は木造三階建てで、初年兵だけまとまって三階の部屋で床に就いた。

翌日、見習士官の教官がきまり、徒手・執銃訓練と毎日を過ごした。

徒手訓練 敬礼、行進  
などの訓練

たまに軍歌を歌いながら

教官に引率され有栖川公園を行軍して、娑婆の空気を満喫できたのはうれしかった。

四月七日までの二回の日

曜日に、妻が渋谷君の妻君と一緒に面会に来てくれ、後で古年兵に叱られはしないかと思いつながら、仕合わせなひとときを過ごすことが出来た。

### 二 渡 満

四月八日、突然我々初年

兵は、他の部隊に転属することが決った。新しい被服九九式小銃、帯剣が支給されたので、いよいよ戦地に向うのではないかと、初年

アパートの人に送られて

兵の間で噂が広まった。

九九式小銃は、昭和十四年(紀元三〇〇九年)製、試作されたため、名付けられた。旧日本陸軍の主要小銃の明治三十八年(二〇〇)制定の三八式歩兵銃と比較すると口径七・七mm(三八式6.5mm)と大きさが、銃身六五・五cm(三八式七八・五cm)は短かく、重量三・九kg(三八式四・二kg)と軽かった。五発装填であった点は同じ。

武装した我々一八〇名は午後十時、東部第七部隊(近歩第四連隊)を出発し、一路品川駅に向った。我々を乗せた列車は、午後十一時すぎ品川駅を発車し、途中、国府津駅に止まった。そこで思いがけず父と義兄が夜半の見送りに来ていて、貴重な飲食物をこっそり渡され、非常に感激した。

昭和十六年三月頃迄の現役入営兵は、予め北支とか満洲の派遣要員として、大まかな地域を示されていたと聞く。また、故国を立つ日時は、一応秘密になっていたが、実際には、本人よ

り家族宛に面会日を葉書で知らさせ、面会の折に、輸送船の出帆する日時を伝えさせる便法をとっていた、という。

だが、私の場合、満洲に派遣されるのは全く分かっていなかった。あるいは、昭和十六年十二月八日、わが国が米英に対し宣戦を布告し、戦争に突入するようになってから厳秘となったのかも知れない。

それなのに、父と義兄が夜半に国府津駅に見送りに来てくれるとは？

シベリアから復員後、分かった事だが、当時、鉄道に勤めていた義兄が、軍用列車の運行時刻を、こっそり突きとめていたのであった。

国府津では二〇分程停車し、御殿場線で沼津に出、西へと進行する。車内は銃戸を降ろしているの、何処を通過しているか分からない。十数時間の後、列車から降ろされたのは下関で、駅弁を渡され、小さな船に乗船し、玄界灘を通過する頃は食事も出来ない程酔ったが、釜山に上陸すると、すっかりよくなった。

## 露国・日露の役俘虜のこと(13)

## 八十七年ぶりのお礼 後編(4)

隠岐威重

米作を中心とするおとなしい農・町民は、変貌していった。

でも、もう少し日本人の心底を探ってみよう。特に武士を、我々が住む現在の隣の時代の徳川時代近傍の武士を。この問題も、三、四百年の時と、複雑な政治の波もあり、一口に云うのは大変な冒険であるが、また、独断と偏見をお許しを乞う。

徳川幕府は幕政の基を儒教に求めた。朱子学なる教派は、他派より形而上的な考えを奉じ、形式を重んずる考えを基にしている。儒の教えでは、国と国との交わりも、中國を祖とし、同じ教えを奉ずる国を友邦と見做し救けた。朝鮮李朝は、熱烈な永年に亘る奉持國で、その教えの祖国中國より強烈な儒教國であった。

に亘って國を維持した。

もともと日本には、万物に神が宿ると云う教えはあるが、儒教の教えの方が体制・政權を維持するに好いとの判断から、徳川幕府はその宗を取ったのだろう。

孔子の教えを基にする儒教、実生活の秩序、維持をもとにする教え、仁義礼知信がその徳目である。

この考えは、我々に身近なものだ。仏の教え、神道の教えにない具体的な生活に即した分かなりやすいものだ。我々の生活の中にもその臭いが強い。

ただ、徳川の中に愛と云う字がない。その近傍の思考もない。注目すべきことだ。

「苦しむ者」「虐げられる者」それを救うための愛、キリストの教えの云う愛は勿論ない。子を愛する。親を、恋人を、老人を、……と愛なる情を表す言葉・考えはあるが、それが大思考

宗教にまで昇華、高揚はない。弱い者を救うと云う気持ちはあるが、それは同情と云ったらしいか。その裏には女々しいと云う感情が付き纏うのではなからうか。自分がそんな場に置かれたら、潔く死ぬ、腹を切る、と短絡して処理してしまふ。その方が、潔く美しいと思うのだ。信仰の世界から、美学の世界に飛んで、一足飛びに美の中に入っ

て行く、日本人の特性である。特に武士はそれを強調する傾向が強い。それを明治の将兵は当然と思ひ込み、軍上層はそれを巧く導いていった。

だが、戦場で孤軍になり、傷ついて泥だらけになり、動けなくなつた場合、そんな綺麗事、潔いとか、云うことが出来るか、となる。自分が其処に置かれたとしてみる。淋しくなり、大声をあげて、カアチャン、助けてくれと大声で泣く、それが本当と思う。

ウダウダ、モタモタ、ここまで本当に長々と綴って

来たが、これから実は例のお礼の話に迄持って来ようと、禿筆をふるい墨を飛ばして来たのだ。

あの雨の夕方、

「日露戦役従軍記録書簡往来」内田善作

なる書を、雪子女史より手渡された。そして食するうちにその書簡を読み感激した。

当時の庶民の姿が、国家を、家を、一族を、知人、商売を、どう思ひ行動したかがよく分かる。

遠路シベリヤ鉄道で送られ、露都モスクワに至る。

傷ついた不自由な身で病院に行く途中、路上で可愛いロシアの娘、幼児と云つたほうがいいか、可憐な動作に接する様、また、ハルピンの路上で貴婦人が同情し五十カペーカの銀貨を貰うことが写されているが、なかなか描写眼が細かい。

風俗を見る目、水の不自由な地でのことか、不浄な所に行つても、余り手を洗わぬと、少し皮肉の視線を注ぐのも面白い。帰路ハンブルグ港でのドイツの歓迎の図、同盟国英国の心遣い、露国に親近感を持つフラン

スの小気味良い迄の無関心さ、インドの混迷の様、等々の描写も当時の国際関係、登り坂を昇る小国日本の姿を浮き彫りにしている。

そうだ、書簡往来の前方は旅順要塞の様、乃木軍の攻撃をいささか、もどかしそうに、でも、自分の緒戦の処女性も含めて初々しく誌している。

そんな書簡の往復を辿り、その話を解し、お話を、小説風に直そうと一時は野心に燃えて見た。が、簡素な書簡文、それが伝える心情風景は、崩せば原型に戻らず、余剰を含み、別の物になることを知った。それは老人の筆力不足が一番の原因のことも承知の上だが、別の解決法もない。

一時その書簡往来の書を机上に晒し、苦吟した。そして大悟一番、書簡をそのまま話の中に全文挿入するのが大道であることを知った。そしてほっとしたこれが一番いい道だと思つた。だが一昔前の事とは云え、他家の家族の間の書簡の往来、あまり明らかにしたくないこともある。戦場で重傷を負い、自由を失い、唯一人置き去りになつても、

それは名家の汚れ、不名誉が付きまとう。「あの家の若主人は捕虜だとき」の不用意な一言は、当事者は勿論、家族の心をえぐる。

だが、九十年前、日露の役の時、今からは考えられぬような暖かい交わり、捕虜の取り扱いが両国にあった。その限りでは、ユートピア、極楽の園である。

日本国内、四国の松山収容所を代表とする露人捕虜八万の姿は色々の書籍になっている。その挿話も小説になり多くの人の目にとまる。だがね、八万の露人捕虜に比し二千と数も少ない我が方の捕虜、その存在もあまり知られていない。調べてみると陸軍省による記録はあるが、一市井の民が、傷つき捕われ、彼の地で過ごした経験の記は希だと気付いた。露国の捕虜待遇は、わが国がとった優遇にも劣らぬ物だった。

また、書簡の中の挿話の一つに、……露都の収容所ノジノージで下級士卒が金銭に苦しんでいる中、歩兵第二十八連隊長村上正光大佐……奉天会戦で敵の重包囲に囲まれ捕らわる……が兵卒の困苦を知り、将校の

給料を割き兵に配ることが誌されている。

村上大佐の来たりし以後は、各将校に命じ、給料の幾分を除き兵卒に与うべきことにせられたり。しかし、賛成せざる将校もあり、村上大佐はその将校に向かい「給料を貯蓄し置き何の必要ありてこの如くするや」と云われたと、大佐の言、尤も然り、とあった。老人は大きく笑い膝を叩いた。そして、村上大佐の言に勢いを得て雪子女史に転載の許しを乞いに行った。

始めはやはり家の不名誉だからと転載を渋った。が、老人も必死……大げさかな……の言で、「この書は歴史的なものです、私が解して話を伝えても弱く、不明瞭になっしてしまいます。是非転載をお許し下さい」との言に折れたのか、

「会長さんのおよろしいようになさって下さい」と伝えて来た。そんな訳で次に書簡往來を転載する。

「日露戦役従軍記録書簡往來」内田善作

編・吉田雪子

一、入営からダルニー上陸戦線に着くまで(明治三十七年九月一日……同九月三十日)

前略、今朝まさに時間通り入営、歩兵第一連隊補充大隊第三中隊に編入相成り候間御了承下度、実は組内併て出入職人等にも各々差出す心組に御座候処、何分多用の為素志を果たさず候に付何卒宜しく御取り計らい御礼申述べ下され度御願ひ申上げます 第三中隊には板橋の深川様、西村長太郎様も編入に相成り候に付御安意申上げます。後便にて 早々

重兵衛様 御家内 御中 麻布にて 内田 善作

拝啓 御書面の趣まさに拝見 鈴木様にもおよそ御話申し上候え共 愈々来る十二日迄の中には戦地に出発に相成り候に付 確たる命令のあり次第電報にて申し上候間 御足労様には候え共国府津停車場にて御面会申すべく候 左様御承知下され度願上候 次に和田堂 片野屋 岩下様へも宜しく願上候

二伸 出発に相成り候えば携帯品も沢山にて困り入り候に付 先日 鈴木様に託しお返し申し上候。葉、併せて梅干の極乾きたるもの十個、他に本ネル製チョッキ、極厚毛糸くつ下二足、紙但し防寒用の紙若干。右を御手数様恐入候え共 停車場にて御差出し下され度

願上候。願いまで。 九月十日 夜 内田 善作 内田重兵衛様 御家内御中

前略 御免下され度 陳者出発の義 愈々来る十七日午前四時屯営出発 同七時四十分品川停車場発車の予定に御座候間一寸御通知申上候。私儀国府津停車場にて下車は覚束なしと存じ候。

麻布歩兵第一連隊 補充大隊 第三中隊 内田善作 拜 三十七年九月十五日 内田重兵衛様 (註この手紙には十七日発と記されているが、実際には十六日品川発らしい)

(続)

### 落穂集

◎今年の夏、蝉の声を聞いたのは八月初旬のこと、例年に較べて遅れたようだ。それに、その数も少ないように思われた。から梅雨で一時、県営水道が給水制限を行うような異常渇水に見舞われ、地中の蝉の幼虫の

発生が遅れた、という見方がある。自然の生物に及ぼす影響は微妙なものだ。◎男子まで茶髪が流行している。チャガミとうっかり読んでしまったがチャパツと呼ぶようだ。まだ、国語辞典には載っていない。この言葉、いや風俗が定着したら、辞典に認知されることであろう。一方、女子高

校生の間で、靴下を足首のところまでたるませて履くのが昨年あたりから、目に付くようになったら、最近、スーパールの広告に「女子学生の必需品 ルーズ・ソックス」とあった。ルーズ・ソックスにも種類があるようで、ダラーツとしたのも見かける。次はどのような形のものが現われるか?

# 材木屋綺談 その三



たかた・きくせん

は、いちめんの麦畑で、あちらこちらに寺院の礎石が見え隠れしていた。うっ蒼とした墓石の背後には、杉の大木が聳えて墓所を暗く蔽っていた。その杉大木の十数本を買い受けて私は伐り出した。路も無いので遥か下方の大門のあたりから西方へトラックの搬出路を作った。今から憶えば当時は終戦直後で日本再建のために歴史的评价など考えることもなく商売の手段としたのである。寺の方も経済

今でこそ入生田の長興山は大枝垂桜と春日局、稲葉一族の墓所として小田原の観光名所となっているが、昭和二十年代の頃には忘れられた廃墟そのままに往古の紹大寺大寺院跡

境内に聳え立つ大枝垂桜は、春が来るたびに小田原名物として、数多くの見物客が繰り出すのに、肝心の稲葉一族の墓所に参詣する人が少ないのが残念である。終戦直後には意外と台風襲来が多かった。キャサリンとかアイオンとかキティとか呼ばれた優しい台風女史は、一年おきくらいにやってきて小田原方面に大きな災害をもたらした。これらの台風のうちのいづれかは忘れたが、箱根山を襲った

混乱の中、苦しまざれてあったのだと思う。今となっては無残なことであった。長興山産の杉大木は、製材してみると、肌も美麗な淡ピンクで、幅九十センチもの天井板がたくさん採れた。材木屋としてみれば何んともありがたい銘木であった。現今ならば由緒ある歴史環境に生える十数本もの大木を伐り倒すなど考えられないことだが、終戦直後の時代には誰一人文句を言う人は居なかった。風雪五十年、麦畑は蜜柑畑と化し、

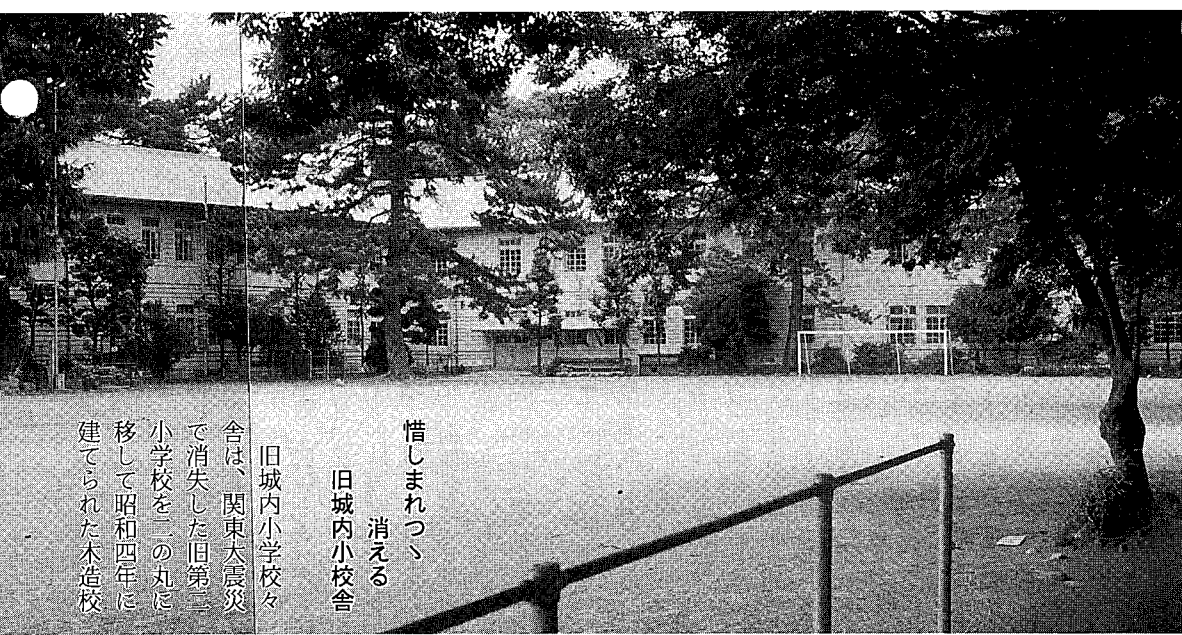
## 終戦直後に 二つの銘木との出会い

出として胸に納めている。品物は全部売り払ってしまったが、いづれ何処かの家の天井板や造作に姿を変えて生きているのだと、あの美しい色と手触りを、思い出の中で楽しんでいるのである。(続)

台風は、元箱根の東海道杉並木を倒壊させた。余り数量が多く、有名な杉並木だけに神奈川県木材組合の手で取り扱うこととなり、私もそのうちの数本を伐り出した。杉並木は、いづれも大口径材で樹令が古いので、年輪がこまかく樹肌も上品なピンク色で、これも銘木商売を十分に堪能させてくれた。私は、終戦直後の混乱期に経験した以上二つのチャンス、今では貴重な思い



## 最後の木造建築校舎 姿を消す (96・7・30撮影)



惜しまれつつ、  
消える  
旧城内小学校舎

旧城内小学校々舎は、関東大震災で消失した旧第二小学校舎を二の丸に移して昭和四年に建てられた木造校舎

# 丹沢の植物

29

## 城川四郎きかわしろう

セリや人參の所属する科をセリ科という。花のつき方がからかさを開いたようなので、カラカサバナ科と呼ばれていた時代もある。

今日ご紹介する植物も、図を見て頂けば花の様子からセリ科だと分かって頂けよう。晩夏から初秋にかけて山を歩くと、この仲間が至る所で白い傘を開いたような花を咲かせているのに出会う。特に標高の高い高原

などでは、たくさんの種類が競って咲いているが、どれも似ているので見分けるのがむずかしい。海岸に生え、食用にするアシタバもこの仲間である。

さて、今日の主役はアマニユウという。この名前に聞き覚えのある人はかなり植物に馴染んでいる人に違いない。全国的には中部地方以北の山中や林縁に生え、珍しい植物ではない。しか

し、神奈川県では丹沢にしか分布せず、丹沢でも大室山周辺だけに限られ、個体数も少ないので貴重な植物である。

やや似ている植物で、丹沢にも箱根にもたくさん生えているものにシシウドという近縁の種類がある。

アマニユウは、葉の基部がへこむので比較的容易に見分けができる。アマニユウは、甘いニユウの意味で、ニユウはアイヌ語である。茎を食べると甘いという。東北地方のようにたくさん生えているところでは食べ

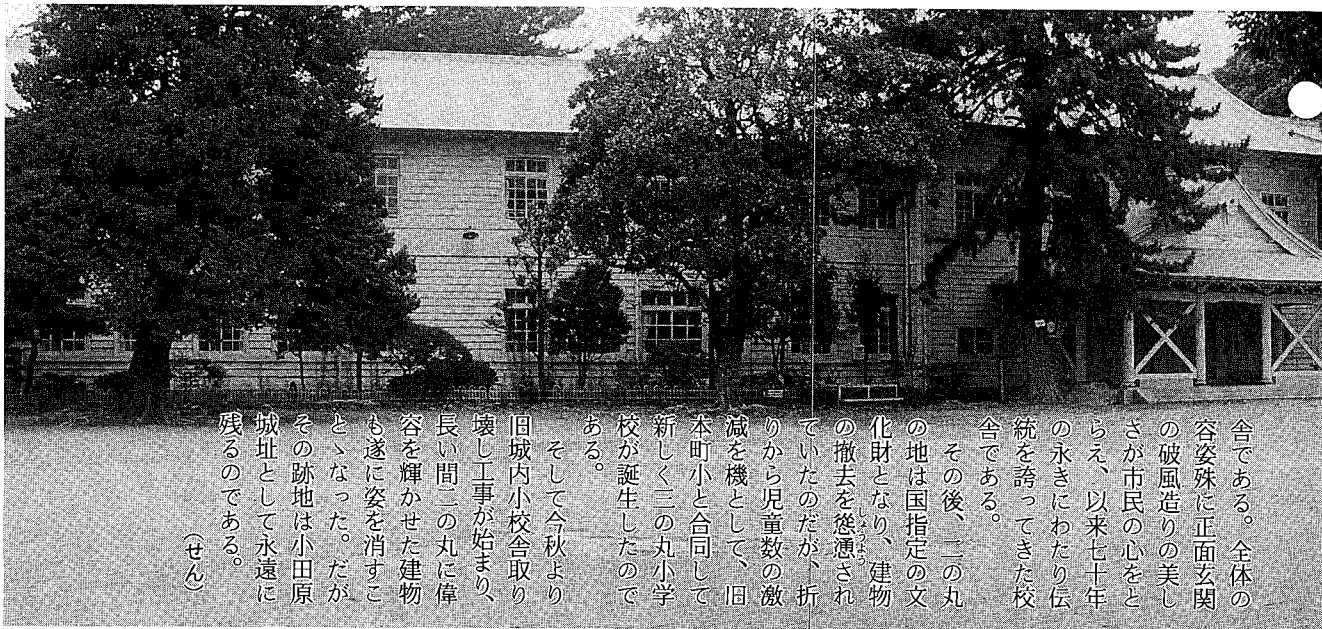
アマニユウ (せり科)  
*Angelica edulis* Miyabe



筆者原図

てもいいが、丹沢のアマニユウは食べてもらっては困る。東北地方で発育の良いものは三尺の高さにも達するが、丹沢では二米ぐらいまでの高さしか見たことがない。それでも、まわりの草をぬいて超然と立っている。

(続)



舎である。全体の容姿殊に正面玄関の破風造りの美しさが市民の心をどらえ、以来七十年の永きにわたり伝統を誇ってきた校舎である。

その後、二の丸の地は国指定の文化財となり、建物の撤去を慫慂されていたのだが、折りから児童数の激減を機として、旧本町小と合同して新しく三の丸小学校が誕生したのである。

そして今秋より旧城内小校舎取り壊し工事が始まり、長い間二の丸に偉容を輝かせた建物も遂に姿を消すこととなった。だがその跡地は小田原城址として永遠に残るのである。

(せん)

# 秀吉の宣戦布告状

中村俊郎

(宣戦布告状)

北条事近年蔑公儀不能上落殊於閑東任雅意狼藉之條不及是非然間去年可被成御誅罰処駿河大納言家康卿依為縁者種々懇望候間以条数被仰出候へハ御請申付而被成御赦免則美濃守罷上御礼申上候事

秀吉の宣戦布告状とは天正十七年(一五六)十一月二十四日に小田原北条氏へ突き付けた詰問状のことである。この書状の締め括りの文に、北条氏を国賊ときめつけ氏直の首を刎ねると結んでいる。詰問状というより正に激烈な宣戦布告状である。

最初の七行は漢字文章書きであるが、次の四行は仮名交りの文章となっている。年月日の下に並べて北条左京大夫どの(氏政、氏直共に左京大夫を名乗る)へと宛名を書いているが、これは相手を目下に見下し、侮辱した書き方である。北条氏は秀吉を成り上り者と軽蔑していたから、秀吉は宛名書で侮辱し、国賊ときめつけ自己の権威を誇示した。

この宣戦布告状は小田原城天守閣で特別展示(昭和四十五年七月一八日)された実物から故・中野敬次郎氏(当時・小田原市文化財保護委員長)が解説されたものである。

この解説された宣戦布告状を読み下し文にして読み易くしてみた。読み間違いがあれば全て不勉強の私の責任である。諸賢のご批判をお願いする次第である。

二非可被成御対面儀候使雖可及生害助命返遣候事

一秀吉若輩之時孤と成て信長公属幕下身を山野に捨骨を海岸に碎干戈を枕とし夜はに寝夙におきて軍忠をつくし戦功をはけます然而中比より蒙君恩人に名をしらる因茲西国征伐之儀被仰付対大敵争雌雄刻明智日向守光秀以無道之故奉討信長公此注進を聞届弥彼表押詰任存分(不<sup>カ</sup>移<sup>レ</sup>時<sup>日</sup>日<sup>令</sup>上<sup>落</sup>逆<sup>徒</sup>光<sup>秀</sup>伐<sup>頭</sup>報<sup>恩</sup>) 惠雲会稽其後柴田修理亮勝家忘信長公之厚恩国家を乱し叛逆之条是又令退治畢此外諸国叛者討之降者近之無不属摩下者就中秀吉一言之表裏不可有之以此故相叶天道者哉予既举登龍揚鷹之誉成塩梅則闕之臣闕萬機政然処氏直背天道之正理对帝都企奸謀何不蒙天罰哉古諺云巧訴不如拙誠所詮普天下逆勅命輩早不可不加誅罰来歳必携節旄令進発可列氏直首事不可廻踵者也

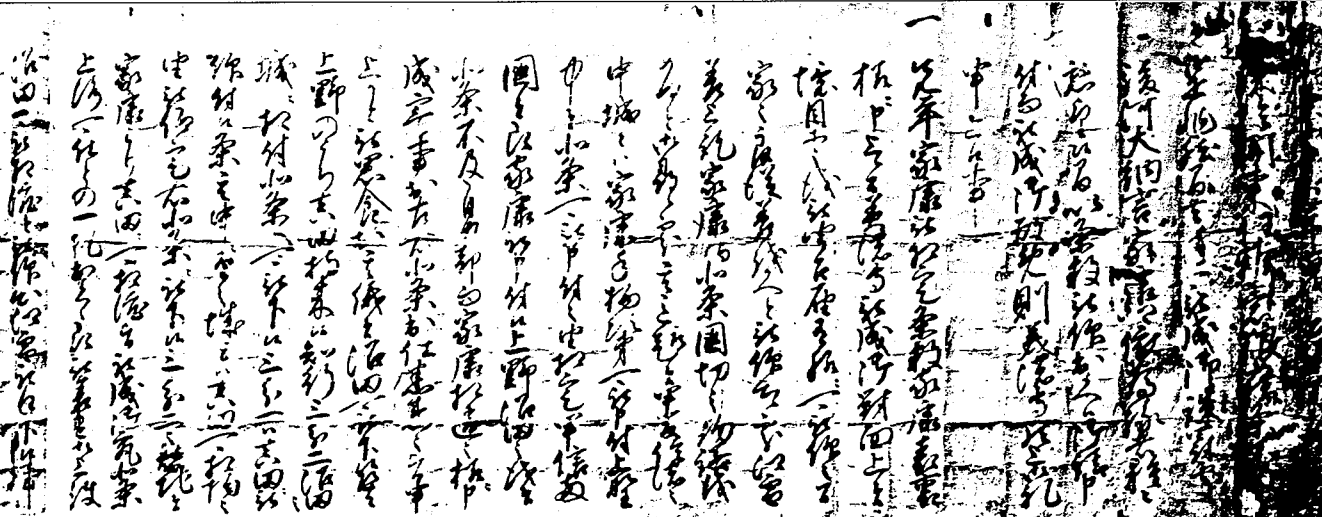
天正十七年十一月廿四日

秀吉(朱印)

北条左京大夫とのへ

「読み下し」

北条事近年公儀を蔑にし上落能はず、殊に閑東に於て、雅意に任せ、狼藉の條、是非に及ばず然る間、去る年御誅罰成さる可き処駿河大納言家康卿縁者たるにより、種々懇望候間、条数を以て仰せ出され候へば、御請申すに付き、御赦免成され、則ち



美濃守罷り上り、御礼申し上げ候事、一先年家康条数相定められ、家康表裏の様に申し上げ候間、美濃守御対面成されし上は、境目等の儀、聞こし召し届けされ、有様に仰せらる可きの間、家の郎従差し越し候へと仰せ出され候処江雪差し上り訖んぬ、家康北条に与えし国切りの約諾の儀如何と御尋ね候処、其の意趣は、甲斐信濃の城々は家康手柄次第申し付けらる可し。上野の中は、北条申し付けらる可きの由相定め、甲信両国は則ち家康申し付けられ候。上野沼田の儀は、北条自力に及ばず却って家康相違の様に申し成し、事を左右に寄せて、北条出仕迷惑の旨申し上げかと思し召され、其の儀に於ては沼田下さる可く候。去り乍ら、上野のうち眞田持ち来り候知行三分の二沼田の城に相付け、北条へ下さる可く候。三分の一は眞田に仰せ付けられ候条、其の中に之有る城々は眞田相拘わる可くの由仰せ定められ、右北条に下され候三分の二の替え地は、家康より眞田に相渡す可きの旨御究め成され、北条上洛仕る可きとの一札出し候へば、即ち御上使差し遣わされ、沼田相渡さる可き旨仰せ出され、江雪返し下され候事。一当年極月上旬、氏政出仕致す可きの旨御請一札進上候、之に依り津田隼人正・富田左近将監差し遣わされ、沼田渡し下され候事。

一沼田要害請取り候上は右一札に相任せ、即ち罷り上る可きと思し召され候処、眞田相拘わり候なくるみの城を取り、表裏仕る上は、使者に御対面儀成さる可からず候、彼の使生害に及ぶ可きと雖も、助命返し遣わし候事。

一秀吉若輩の時、孤と成りて、信長公の幕下に属し、身を山野に捨て、骨を海岸に砕き、干戈を枕とし夜はに寝夙におきて、軍忠をつくし、戦功を上げます。しかして中比より、君恩を蒙り、人に名を知らる。これに因り西国征伐の儀仰せ付けられ、大敵に対し雌雄を争ふ刻、明智日向守光秀、無道の故を以て、信長公を討ち奉る。

此の注進を聞き届け、弥彼の表押し詰め、存分に任せ、時日を移さず上洛を令し、逆徒光秀の頸を伐ち、恩恵に報い会稽を雪ぐ。其の後柴田修理亮勝家、信長公の厚恩を忘れ、国家を乱し叛逆の条、これ又退治せしめ畢んぬ。此の外諸国叛く者之を討ち、降る者之を近づけ、麾下に属せざる者無し。就中、秀吉一言の表裏之有る可からず。此の故を以て天道に相叶う者哉。予既に登龍揚鷹の誉を挙げ塩梅則闕の臣と成り、萬機政を関す。然る処氏直天道の正理に背き、帝都に対し奸謀を企てる、何ぞ天罰を蒙らざらん哉。古諺に云う功訴拙誠に如かずと。所詮普天の下勅命に逆らう輩は、早く誅罰

を加えざる可からず。来る歳必ず節旗を携えて進発せしめ、氏直の首を刎る可き事、踵を廻らす可からざる者なり。  
天正十七年十一月廿四日 (秀吉印)

北条左京大夫とのへ

註  
美濃守 北条氏規 (氏政弟・韭山城主)  
境目 所有地などの境目  
江雪 板部岡江雪・北条氏の重臣  
干戈 干(たて)と戈(ほこ)。武器  
極月 十二月の異称  
夜は よなか  
会稽 会稽の恥の略。しかえし、復讐 (ふくしゅう)

登龍揚鷹 栄達する  
塩梅 政務などを適切に処理すること  
則闕の臣 太政大臣の異称  
古諺 ことわざ  
節旗 天子より使者に賜わるしるしの旗 (錦の御旗)

参考文献  
おだわらの歴史と文化 (小田原市)  
甫庵太閤記 (教育社)  
小田原北条記 (教育社)  
芦間乃道 (幻庵文庫 立木望隆)  
小田原史談 (小田原史談会)  
北条幻庵伝略 (立木望隆)  
幻の宣戦布告状 (北條龍彦)

一沼田要害請取り候上は右一札に相任せ、即ち罷り上る可きと思し召され候処、眞田相拘わり候なくるみの城を取り、表裏仕る上は、使者に御対面儀成さる可からず候、彼の使生害に及ぶ可きと雖も、助命返し遣わし候事。

一秀吉若輩の時、孤と成りて、信長公の幕下に属し、身を山野に捨て、骨を海岸に砕き、干戈を枕とし夜はに寝夙におきて、軍忠をつくし、戦功を上げます。しかして中比より、君恩を蒙り、人に名を知らる。これに因り西国征伐の儀仰せ付けられ、大敵に対し雌雄を争ふ刻、明智日向守光秀、無道の故を以て、信長公を討ち奉る。

此の注進を聞き届け、弥彼の表押し詰め、存分に任せ、時日を移さず上洛を令し、逆徒光秀の頸を伐ち、恩恵に報い会稽を雪ぐ。其の後柴田修理亮勝家、信長公の厚恩を忘れ、国家を乱し叛逆の条、これ又退治せしめ畢んぬ。此の外諸国叛く者之を討ち、降る者之を近づけ、麾下に属せざる者無し。就中、秀吉一言の表裏之有る可からず。此の故を以て天道に相叶う者哉。予既に登龍揚鷹の誉を挙げ塩梅則闕の臣と成り、萬機政を関す。然る処氏直天道の正理に背き、帝都に対し奸謀を企てる、何ぞ天罰を蒙らざらん哉。古諺に云う功訴拙誠に如かずと。所詮普天の下勅命に逆らう輩は、早く誅罰

天正十七年十一月廿四日  
北條龍彦書す

北條龍彦氏著「幻の宣戦布告状」より

古文書講座 17

線香につき法授寺口上(写し)

内田 清

法授寺と箱根関所の戦い

城山(しろやま)二の二の日蓮宗法授寺は、慶応四年(明治元年一八六〇)当時、小田原城下の北、井細田(いさいだ)口のすぐ南(現大雄山線緑町駅北)にあって、官軍の菩提所として権威を持っていた。有名な板橋地藏尊の境内東隅にある「五月廿一日箱根において戦死した」豆相軍監中井範五郎以下十三人の合同墓の導師を勤めたのが廿六代日蓮上人だった。

箱根関所の戦いはおかしな戦いだった。幕軍脱走兵らの遊撃隊と官軍としての小田原藩兵との戦意のない撃ち合いが、藩論の変化で和睦となり、翌日両者で監察隊員たちを血祭りにしたもので、十三人は小田原藩の背信による犠牲者であった。

賑やかな地藏尊の傍らで忘れられている官軍墓の法要が法授寺の岩田住職によって、また草取りが地元老人会によって今でも実施されていることは広く知って欲しい事である。

法授寺の口上と紋蔵の願書

写真版は法授寺として福泉村(ふくせんむら)〔南

足柄市)紋蔵の願書に答えた返信である。口上は、このような文書の標記の形式として用いられ、口上書や口上書きと区別されている。

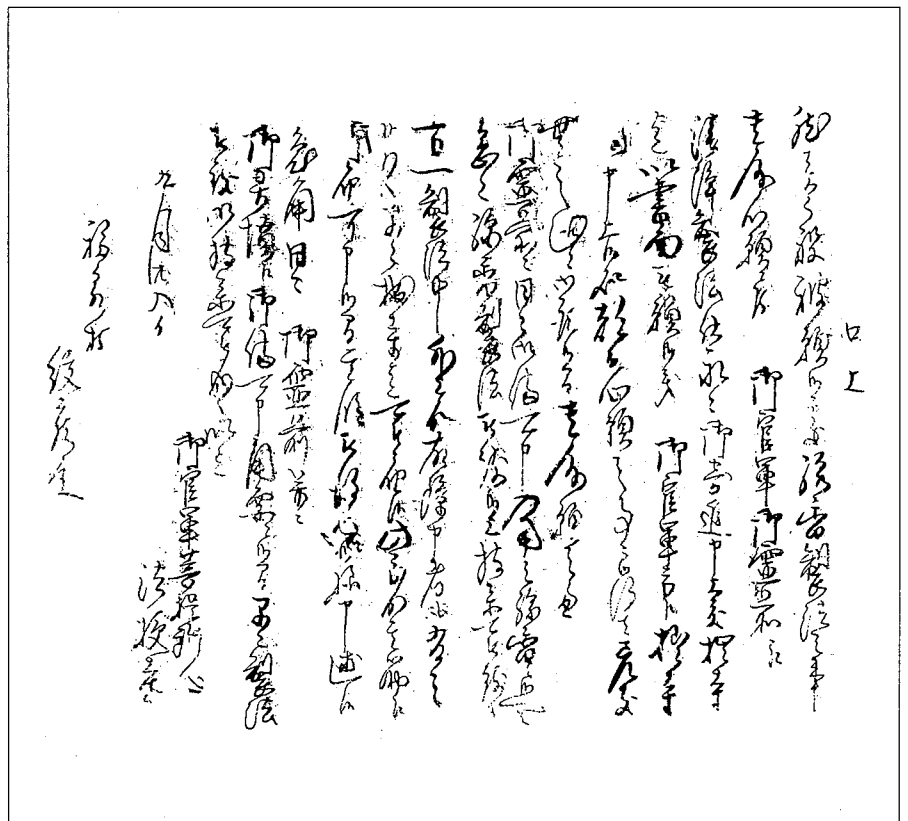
- ① 貴殿の官軍霊前への線香寄進願いは、官軍が差支えないとのことだから、念入りに作って持参されたい。
  - ② 製作中に苦情申立人が出たら直ぐ拙寺へ届けなさい。当方からその筋へ届ければ、善処されます。
  - ③ とにかく日々霊前と墳墓へ備えたので早々製作して持参されたい。
- 紋蔵の願書の要点は次のようだ。
- ① 七月に官軍霊墳のご利益話を聞いて、立願したら妻の長患いが平癒して有難かった。
  - ② いか程費用が高んでも、永代線香を寄進したいので、許可願いたい。

〔南足柄市史〕3 P 664)

福泉村紋蔵と日蓮上人の思惑

紋蔵は五年前から線香製造を始め、先発の雨坪村の線香屋の反対で水車を撤去させられたりしているから、この際線香製造公認が目標だった。

この文書は雨坪村にあったが、紋蔵作の写しらしい、妻の平癒話もいかがわしい。日蓮上人もその辺を承知だった節が窺える文書である。



注意してほしい字句

A 御(ご)の字、口上(こうじょう)の字

しかればこんばんねがわれそうろうとところ さて、このたび願われた。

口上の書き出し句である。候と處(処)のように詰まった字、間伸びした字に注意。次の(線香)と共に

B ねんねせんこうせいほういたされ

心を注いで線香を製造され。念々か急々か迷うところだが、「早々製法」があるもので、文脈から念々とした。香と致は虫食いで不明瞭だが文章中にある同形の字から決める。



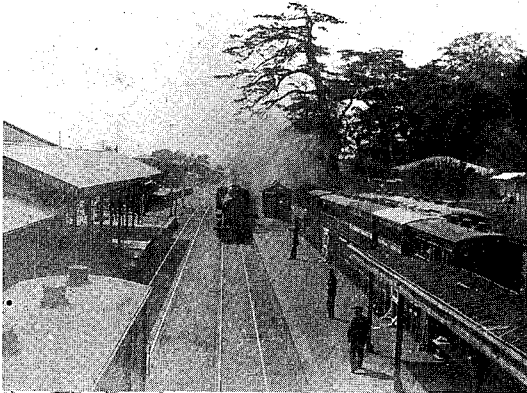
C  
伊豆山前、湯、伊豆山前

# 写真今昔

## 小田原・熱海間、人車鉄道より 蒸気軽便鉄道へ

熱海よりの軽便が小田原駅に到着しようとする情景である。駅は、国道一号線と旧熱海街道の分岐点の早川口に置かれた。

蒸気機関車による運転が開始されたのは、明治四十年(一九〇七)十二月のことである。写真は、鉄道が人車から蒸気に切り替えられたのを記念して、明治四十年頃に撮られたと思われる。



これいぜんならびにこれいふんえ  
靈前と墳墓へ。靈と異体字の灵(靈)  
が使われている。井と江も注意。

社名が、豆相人車鉄道から熱海鉄道株式会社に変更されたのは「熱海市史」下巻によると、明治三十八年四月とあるが、ここに掲げた辞令からみれば、明治三十九年か四十年ということになる。

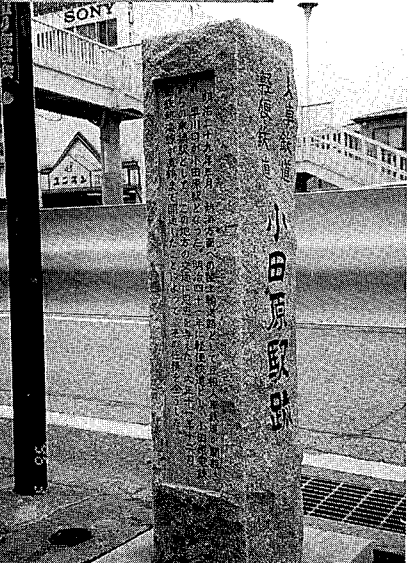
社名が、豆相とか熱海と冠せられているのは、資本の提供者が熱海に別荘を持つ東京・横浜の実業家と熱海一流の旅館主であった関係からである。

ついでに記すと、辞令の日給四十七銭というと、当時の日雇労働者の平均が四十九銭であり(値段の風俗史「朝日新聞社」、ほぼ見合う金額だが、当時(明治四二年)の内閣総理大臣の年俸一万二千元に比較すると、八百五十倍以上の較差があった。



小田原驛常雇  
車丁採用  
即日給金拾陸銭  
明治三十九年十月  
豆相人車鉄道株式会社

自今日給金四拾  
七銭給與ス  
明治三十九年十月  
熱海人車鉄道株式会社



### 口上

然者、今般被願候処、線香製法之事  
貴殿心願付 御官軍御靈前

清浄製法仕、永々御寄進申上度、拙寺  
迄以書面被願候義、御官軍拙寺

申上候処、都而心願之事、候得差支  
無之趣、御座候間、貴殿願之通

御靈前、日々御備可申入用之線香候へ

念々線香製法被致候上、持參可被致候。

万一製法中外々より故障申者も有之

候ハ、早々拙寺迄可被届候。此方より其筋

届可申候間、其段被得心候様申述候。

兎角日々 御靈前并

御冥墳江御備可申用要候間、早々製法

被致御持參可被成候。以上。

九月廿八日

福泉村

紋蔵殿

御官軍善提所

法授寺

# 震災日記

## 片岡永左衛門

大正十二年  
十一月四日 (續)

今は農繁にて参詣人も少なく、足に疲労も覚えし頃左の山を婦人の下り来れば、室生(寺)はと聞けば、此の先になりと。

左折りすれば菜園矮陋の家(野菜畑も狭い小さなわびしい家)も見え来り、また、少し徒歩すれば、山上山下の所に人家も又みえ、甲川に付て左折りすれば、一の部落となり、旅人宿の看板を揚げし家に入り茶を求め、持参の弁当を食し小憩して、殆ど破潰せし反橋を渡れば、女人高野の石標あり。

背景の大師山は、樹木繁茂に任せ、斧を入れる稀なれば、千年の翠色を堪え、自ずから渴仰(深く慕う)の念を生ず。

鎌倉時代の建築なる灌頂堂(真言密教の秘奥を授ける道場、弘仁時(八〇〇)言平安時代初期)の金堂、一夜造りの塔との称ある三重塔は、三丈八尺、幅八尺余

にて、構造簡易にして雄大ならざるも、甚だ古雅なり。大師の余影を拝すれば去るに忍びず。もし時日の免せば一泊をと思わざるに非ざるも、遂に境内を出でて橋を渡り、幾度も顧みして趣を味わい、自動車の発車を氣遣いながら頻りに道を急ぎ、三時に大野に戻り自動車に乗り、趣味多き道を走り名張に着すれば、四時を過ぎたり。

そこより又軌道に乗り、暫く伊賀上野駅より汽車に乗り、亀山も過ぎ名古屋にて一泊と思いたるも、思い返して、また、夜行に乗り少し睡眠して覚むれば気分例ならず。

岡崎に下車し、駅前の旅舎に入り服葉しひと眠りすれば、幸に常に復し、また夢に入るも、再び覚ゆれば七時なり。早々起床し、八時十八分に乗る。近來は多く夜行にて、この辺は久々の昼間の乗車なれば、浜名の風光、富士山寄りに旅行気分をよく果し、五

時国府津にて乗り替え、無事帰宅せり。

六日 晴

九時出勤。今日より、また震災気分となり、三時帰宅す。

七日 晴

バラック屋根の建築も、おいおいに増加せしも、未だ輸送の不便等にて、材木はいっそうの騰貴となり、災民の困難は予想外にて、町役場に於いて尽力し、此の程より売り下げを計画して開始したり。普通材木商より幾分は安価なれども、一人にて多くを買い入れを得ず、僅かの材木をかうにも半日を要し、安価と雖も震災の当時より却って高価となり、目下、中貫一丁四十五銭、杉は五十三銭となり。

八日

赤十字社に引き続き、済生会にて出張し無料治療のため、開業医に行く者少なく、大□になるに、業務不振を予想した弁護士は、停車場等にて掠奪者の検挙を始め毎日拘引したため非常の繁忙なりと。

九日

漁業も東京その他に輸送不便と京浜の需要減少のため、不漁の日は高価となるも、少し水揚げ多き時は、安価となり、漁師も魚屋も困難なりと。今日は漁獲多くウズワ五十本を九円にて買い塩漬けせり

十日 晴 夜に入り雨

大工は、この際非常に繁忙なるに、京浜にても俄に需要を増し、一日四、五円より六、七円の収入のため当地より出稼ぎする者多く、土地にて不足を補うに、箱根細工の職工は、輸出皆無のため大工に早替りして働くも少なからず。

十一日 晴

東京にては、野菜の需要少なく、農家は困難と聞くに引き換え、当地は少なく却って騰貴となれり。

大阪、名古屋その他より

大工の出稼ぎに來り、請負工事を為すも、他地方の者はそのとき限りの工事にて誠意なく、余り面白からざるとの評あり。然れども、これらのため下等の飲食店は震災前より却って収入多

しと、世は様々なり。

十二日 曇

震災にて海底降下し(実際に土地が隆起)、海岸も、それ以前より七、八間(約12.7~14.5m)は引き下がり、この頃に至り井水減少すること多く、飲料も不自由をなすも多きに、幸いに私宅の井戸はその後異状なし。

震災以前は、藝妓家業者は、十字町、欄干橋(南町)より高梨町(本町)迄と宮小路(本町)等の国道に接せざる処に居住を許可せしに、震災にて家屋借地の少なきにも拘わらず、警察署にては宮小路より唐人町(浜町)辺の裏通りの他は、居住を許さざる方針なるが如くにて、当業者に於ては、その区域の狭少となりと、従来の居住地にバラックの準備をなせし等にて苦情も少なからざりしに、追々緩和し一カ年は従前の通りとなれり。

十三日 晴 大風

昨夜より大雨に風も加うるに、未明より止まる。不快にて欠勤。一日大震に引き続き余震あり。去月二十三、四日より一時余震も止

み、地震も忘れんとせしに四、五日過ぎ又々強震二、三日続き、その数は今に少しの余震毎日なり。

近年、東京その他にて地震売買と唱え、地所持主の替わる度に地代を引き揚げ、借地人に迷惑を掛け横暴の者有りしたため、裁判にては借主に有利の判決をなし、遂に借地法も発布せられ、追々地借有利となり反対し、地借も横暴の者出で来り、地主に於ても不安の念を生ずる者多く、容易に貸借に應ぜず、正直の借地人には不便となれり。これよりしても、法の制定は非常に考慮を要せり

十四日 晴

昨日小田原報徳社より震災見舞として金十五円を贈らる。

さて、この見舞金は、ただ見舞いとして使用すれば、それ迄にて差し支えは無きも、意義或るものとしての使用は相当考慮を要す。報徳神社も大破なれば、これに寄付するも徳に報いると云う得べきも、それにては何の趣味も無し。この十五円を活かすにも幾倍にもして有益に使用せざれば、古

先生(二宮尊徳)の思し召しに非ざるべし。然るに、余は幾倍に使用するの能力と年齢となし、如何に使用すべきか。

十五日 晴 風

震災前は皆無とも云うべきなりしに、目今は房州地方より殆ど毎日魚荷の到着するは、震災以来の変調なるが、京浜の需要払底のためなり。それは何時迄続くべきか。

十六日 晴

行用にて本店に行く。当停車場にて見れば、家屋の古材を荷車に積み込みも、積み来るを運ぶも有り。これは災後の実況なり。

防寒に戸棚に古雑誌を張る。張りながらふと思ひ出せしは、母は十三年前に九十の高齢にて永眠なされしも、その時は、百も百五十も在れかと思ひしに、と、愁傷せしに、今考えれば、もし、この仮屋に居るさまは、心困りしき限りなりと思ふに付き、新年、言志の勅題の胸に浮びたれば、いかにして親に仕へむ年なれど 仮屋の板間

風恠しくして

十七日 晴

尾崎芳子(尾崎亮司妻、永左衛門娘)買物の上京、今夕帰宅。親一(永左衛門伴)も同行帰省。

当地呉服商人全同も震災後の物資應急せしため協同販売せしが、その期限は廿日にして金七万五千円を売り揚げたりと云うも、当地区ならず横須賀、東京にも幾分は売りたる由なれば、この高よりすれば被害者は全く窮乏せるも知らる。

十八日 雨

午後親一帰京。過日の調査に依れば、震災の当日当地の失火は廿四カ所なりしと。

震災後は、赤十字社より医員、看護婦出張し、傷病者診察に従事せしに、十月末迄に延人数一万五千人を施療せしとの事なれども、平常は医薬を用いる者少なく、傷病も無料なれば診療を乞うために、かく多数となれり。然れども、一端を踏めば一端揚ぐるの道理にて、開業医は非常の影響を蒙り一般に閉散なりと。

十九日 晴

箱根細工は、交通不便にて原料に不足し充分に製造不可能となり、職工は俄大工に急変せるなど震災の影響は総てに及べり。

廿日 晴

三時半退出。俄に上京を思い立ち親一方に至れば、皆一同壮健。龍夫・涼子も肥満するを見る。信書には無事と毎度有るも、面接して猶安心。

震災にて人手不足し、漸く今日より温州(みかん)採収を始む。震害に道路破潰し運搬困難のため悲観したるに、震災地柑橘運搬には、特に荷車配給の鉄道省にて留意し、他に比し幾分の便を得たれば代価も可なりと成れるか。人夫の雇い入れを顧慮し、この回は山売りとなせり。

廿一日 晴

東京市内の交通不便にて諸人出勤時間は電車の乗車困難なれば、十時、龍夫と同道、佛師屋に立ち寄り位牌を注文し、牛込見付の通信博物館に至り館長桶畑宜明氏に面接、小田原藩の御

宿割御船割手控巻冊、慶応年間(一八五〇〜一八六〇)箱根関所手形巻通、東海道巡覽地を同館に寄贈す。桶畑氏の談によれば、同氏も同書巻冊を所蔵せるもこれは東海道最初の道中記にて、寛延二年(一七五〇)の出版なるも元禄年間(一六六〇〜一七〇〇)に再版せり。しかるに拙者より寄贈せしは寛延の初版なれば特に珍本なりと。館内の列品に付き種々説明せらる。

辞して日本橋より銀座を徒歩し、中食して龍夫と別かれ、国民新聞社々長徳富蘇峰先生を伺い久々に面会、箱根関所手形十一通その他大久保家に係わる文書三種を贈り、拙編『小田原史』は震災にて汚損せしも、却って好記念とそのまま持参せしに、閲覽に直ちに序文を巻頭に自記せられ、社内の印刷工場を自ら先導して観覽せしめらる。種々談話あり、二時半辞し、親一方に帰宿。

(続)



雪中に、富士山の白煙を

たく人もあらじとおもふ  
ふじのやま ゆきの中よ  
りけぶりこそたて

これは、今から一千年前  
(元弘)に活躍の歌人で、相  
模国司であった源重之の歌  
であります。

この一首につきまして、  
目加田さくを先生(梅光女  
学院大学客員教授、福岡女子  
大学名誉教授)著『源重之  
集全釈』(風間書房昭和六十  
三年九月三〇日発行第二六七  
頁)から、引用させていた  
だきますと、

〔通釈〕

ただきで火を焚く人も  
あるまいとおもうよ。そ  
れなのに富士山は山頂の  
雪の中から煙がまあ立ち  
昇るんだよ。

〔参考〕富士山の雪中の煙  
は 万葉集卷三

山部赤人 詠不尽山歌に  
319……………燎火乎 雪以滅  
落雪乎 火用消通郡……………

と詠まれて以来、歌人の  
好歌材となる。

夫木抄 雑 煙 百首中  
重之

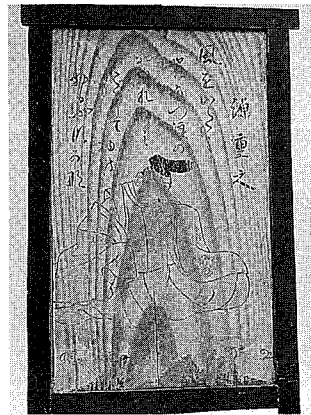
たく人もあらじと思へど  
よしの山雲のうちよりけ  
ぶりこそたて

この、歌詠について、  
「百首中」と、目加田先生  
は、記されておいでになり  
ます。

重之は、百首歌の中でこ  
の歌を詠じているようで、  
その後には、この情景を眺  
める現地へ下向します。相

一千年前に旧縁を求めて

歌人 源 重 之 (4)  
日下部 庄一



模権介を最初として、次に  
権守として合せて約十年間  
相模で国務を執ることにな  
ります。

冬になれば、雪中に富士  
山を望んで、この歌を現  
実のものとして、空想中の  
歌から、目前の白煙を、心  
の中に刻んで、生活をして  
いたと思います。それ等を  
察して、重之下向の歌を、

目加田先生の二三四頁(前  
掲書)から引用させていた  
だきますと、

はるかに京よりくだりし  
に

あまぐものわかれし中に  
かよへばやよそなるそで  
のかはかざるべき

〔通釈〕 はるかに京より

にひどくしめついていると  
は。

〔語釈〕○あまぐもの一  
雲の、ここでは、わかれ  
の枕詞。大空の雲はただ  
よひ遠くはるかにみゆる  
ところから、天雲のは、  
たゆたふ、ゆく、わかる、  
よそ、おくかもしらず、  
たどきもしらず等にかか  
る。

と、目加田先生は、記さ  
れておいでになります。

この文章を拝見して、私  
は、

重之公の生活はどうだった  
のかな、どのような心情で  
あったのかななどと、公  
の気持ちを思わず察せず  
にはいられませんでしたので、  
ここにもう一首について、  
目加田先生の一一〇頁を引  
用させていただきますと、

まださかぬえだにうづま  
くしらゆきをはなどもい  
はじ春のなだてに

〔通釈〕まだ 咲いてない

梅の枝にまあ冴えている白  
雪を、いくら美しくとも、  
梅の花なんていいはしない  
よ、春の名折れだからね。  
〔語釈〕○名だて一名立、

「名に立つよう」にすること、  
うき名を立つること、名を  
れになること(大日本国語  
辞典)

後拾遺集春上 加賀左衛門  
ちるまではたがねをせな  
むこのもにかへらば花  
のなだてなるへし  
〔参考〕新古今春上 源重  
之

梅がえに物うきほごに散  
る雪を花ともいはいはじ春の  
なだてに

と上句が異った歌が収めら  
れている。新古今の出典未  
詳。

と、目加田先生は、記され  
ておいでになります。

この文章を拝見して、私  
は、ふと、考えさせられる  
ような気持ちになりました  
ので、この「まだ咲かぬ枝  
に」の次元へと、私も歌の  
視点に立たせていただきました  
と思います。 重之相模  
権介は、地方官として、相  
模守の補佐役でありましよ  
うから、帯刀長、官位と比  
較されれば、権介の拝命は、  
まだまだ「梅の花ではない」  
美しくてうれしいが、枝に  
留まっている雪の美しさな  
のだと重之自身を、雪と花  
に重ねた表現ではあるまい

かな、と、思います。

重之帯刀長は、昭和初期の天皇制時代でいうならば、宮家出身者の近衛師団長であった、と云ふところでしょうし、相模守の補佐ではまだ、本当の梅の花ではないんだよ、と、重之が、自身に聞かせている声が聞こえてくる感じになります。

従って、この歌は、重之権介時代の歌詠であり、相模国での歌詠であったと思いたくなります。貞元元年(九二一)からの五年間は、国司として、充実した日々を送られたと思います。

箱根連山の夕映えも、富士山の白煙も、共に眺めては、心にうれしく、また明日の、洋上の日の出を待つ、そういう生活の重之であったと思います。

この頃の、駿河国司と相模国司の間でとり交されたとする、希少な歌詠を、目加田先生の、第一七五ページから引用させていただきますと、

兼盛するがのかみなりけるとき、そのくになりけるをよこのとこのきよみかせきといふところにもた人まうけて、このめの

もとにかくさきりければ、かくなあると、かみにうれゑたりければ、かみねもり

よこはしりきよみがせきに人すゑていつてふことばなくとゞめつ

〔通釈〕平兼盛が駿河守であった時、その駿河国に住んでいた者の夫が、清見ヶ関と言う所に、又愛人を作ったので、その妻が関守兼盛に、「うちの人がこうこうです」と愁訴したので、兼盛(がこう詠んだ)

横走り清見が関ぢやあないが、つい暴走しちやって、清見が関に愛人をすゑて、自分もとまって、いつ本妻の許へ戻るか、もうそのことは永久にやめてしまったよ。何しろ関所は人をとめるところだからなあ。

〔語釈〕○横走―延喜式駿河国駅馬……横走廿疋……伝馬……横走駅各五疋。

「横走郷は酒匂川の源にあたる山中是なり」  
○清見関―庵原郡興津町の清見寺がその址という。

この歌の返歌を、目加田先生の二七八頁から引用させていただきます。

をんなにかはりて  
せきすへぬそらに心のか  
よひなばみをとゞめても  
かひやなからん

〔通釈〕 女に代って(返歌をする)  
空には人をさえぎる関所

なんかありませんから、あの人があうちに戻ってきて、空を通過して清見が関の愛人のもとに心をかよわしているんでしたら、いくら体は私のもとにとどめていても、魂はないぬけがらなんですから、しようがありませんわね。

〔参考〕重之が相模権守となったのは貞元元年(九二一)、兼盛が駿河守に任ぜられたのは天元二年(九二七)、この天元二年八月十七日〜天元三年(重之在任期限)十二月は間に一七、一八の作歌年代はあると思う。

と、目加田先生は記されておいでになります。  
一七〇は、「よこはしり」  
一七は、「せきすへぬ」の歌の番号です。  
目加田先生の文章を拝見

して、私は平安の駿河国司が歌詠して、その返歌の代役を、相模国司がつとめるとは、ほのぼのとなんともしえない夢空間を、現代の私達に、供給して下さったこと、と思います。

駿河は、富士そのものの立脚地です。  
麓から仰いだ重之、富士の白煙は、相模国の上空へ流れ来て、人々の歌心を誘

### 元高知藩士の墓が東町の呑海寺に

小田原市東町三丁目にある呑海寺の墓地に、元高知藩士(維新後の呼称)坂本瀬平之墓と刻んだ高さ九五cmほどの墓石(写真)がある。右側には、「文久二年十一月十五日戦死 享年三十五」と記され、左側面には明治二十二年五月建之」とある。

文久二年(一八六二)に、小田原に戦争があった訳ではない。よく調べてみると、坂本は、この年の十月十日、網一色(東町)の松並木で土佐藩脱藩者と同志打ちをし重傷を負い死亡した。坂本は、剣法にすぐれ、土佐藩剣術取立役となつて

い、歌人相模、そして同じ百人一首歌人の鎌倉右大臣源実朝まで、たなびいて行き、やがて相模の地に吸収されたものと思います。

平成の今でも、私は、富士山を眺めていて、青空の頂上に、うすい白雲が片寄って流れる時には、富士の白煙をみたような気持ちになり遥かな思いを持てます。(続)

いる。文久二年十月河野万寿弥ら同志五十余人が脱藩したのを知り、急いで京に上り同盟入りを希望したが、佐幕派の密偵と疑われ、入ることが許されなかった。

同年十一月七日、小田原宿で同宿の松垣清治、田内衛吉、今橋權助に一旦は許されながら、置いてきぼりにされたのを憤り松垣と網一色で争論刃傷に及んだ。たまたま遅れて来た田内、今橋の助力があり、坂本は斃

された。坂本は、後日、勤王の志があったことを認められ、土佐藩の維新殉難者として名誉を回復、志士として遇された。(明)



紅蓮洞・坂本易徳ぐれんどう さかもとやすのり

(25)

## 岡部忠夫

前号で『函東会報告誌』の編集委員の一人である相澤親之助について、

「その弟と思われるのに、相澤鉄之助がいる。一応兄弟として捉えたい」

としたが、名前の末尾が同じだけでも、兄弟らしく思われる。それに、東京では、親之助、鉄之助は共に麴町区飯田町四丁目二番地に住んだ。

旧小田原藩士に相澤の姓を名乗る者はいない。小田原市内で、相澤を名乗る何人かの方々に尋ねしたが、親之助・鉄之助に結びつく情報は、何も得られなかった。すると、残りは、在郷の人である。

「相澤の姓は、荻野かりの(南足柄市)に多いですよ」

と、教えてくれたのは、内田清氏であった。

内田さんは、『小田原史談』に古文書講座を連載されているのは、皆さんご承

知の通りである。南足柄市弘西寺に住まわれ、南足柄市史編集委員で、小田原市文化財保護委員を兼ねていられた。

内田さんは、温厚篤実の言葉がピッタリの人である。しかし、史料の選択には、厳しい姿勢を持っていて、一つの史料だけでは速断されない。史料の裏付けを重んじられる学徒であり、先学の幾つかの誤りを指摘されている。

内田さんに、相澤姓は荻野に多いと聞いて、『函東会報告誌』を、読み直してみた。

すると、函東会の賛助会員として、南足柄村の相澤延助が、毎年三田の寄付を約したという記事があるではないか……。

「これだ!」  
すぐさま、相澤親之助が延助の息子であると、判断した。

村方で、函東会の賛助会

員になる人は、ほとんどが在京学生の親たちである。親之助は函東会の幹事で、会の機関誌の編集委員を兼ねている。相澤延助が、相澤親之助の父親であるとしても不自然ではない。

再び、内田さんに尋ねてみた、今度は電話で。

「相澤延助は、南足柄の何処に住んだか分かりませんが、漢方医でした」

慎重な回答である。

荻野は、南足柄の中でも奥まった山村であった。足柄上郡の分は天保十年(一八元)にまとまったといわれる、官撰の『新編相模国風土記稿』によると、「民戸五十五」とある。荻野が、明治二十二年(一八九九)南足柄村の大字となったとき、戸数は九十戸に増えている。だが、この戸数では、漢方医としての生計は、成り立たなかったのではあるまいか。

内田さんの返答が、相澤延助が南足柄の何処に住んだか分からない、というのでも、以上のような言外の含みがあつての事かもしれない。それに、史料にも相澤延助の居所は、単に南足柄

とあつたのだろうか?

それにしても、相澤延助が漢方医であつたと言うのは、親之助と親子の関係を示すものと思われる。

相澤親之助は、東京大学医学部予備門に入学した。西洋医学修得のためであつたに違いない。予備門というのは、のちの旧制高校がこれに当る。

これからは、漢方では時代遅れである、西洋医学でなければ、と、親之助は、親の思いを、自ずと心の中に深く刻んだ結果ではなからうか。

このような延助と親之助との関係を、考えるのだが……。

しかし、親之助は、病氣のために学校中退を余儀なくされた。病氣療養中、休学という訳にはいかなかった。挫折である。

親之助の病は、療養のしかいあって癒えたが、目標を立て直す必要があつた。

当時、東大は、西欧の学術を早急にわが国へ移植するための教育機関だった。進級できなければ、退学しなければならなかった、という。再び同じ勉学を、時間をかけて繰り返す事は、

許されなかつた時代でもある。

親之助は、目標を変え、アメリカに渡ることを思い立ち、明治二十二年(一九〇九)十二月三日、横浜港からベルジック号で旅立ちすることになった。

これに先立って、函東会の面々は、十一月二十三日、京橋木挽町萬安樓で送別会を催した。

この日、生憎雨だったが会する者、旧小田原藩主大久保忠禮の嗣子忠一を始め三十余名。この中には、親之助の弟の相澤鉄之助や酒田村(開成町)金井島出身の山下格三もいた。

席が定まると、幹事の伊東直三が会員を代表して送辞を述べ、続いて、坂本易徳、目良恒、大庭永成、永田一茂の旧藩士の子弟らが、代わるがわるに送別の意を述べている。

坂本易徳は、「相澤親之助ぬしを送る」と、自作の歌を、高らかに読んだ。

一 勇める心 立つ気負

大任を担い鹿島立つ  
奮える君に敷く宴を開き  
ここに送るなり

二 今宵の酒宴面白く、さ

されつ注しつ笑いつつ愉快に愉快、重なりて君との別れ惜しまるゝ

三 別るも会うも何のその雲をひらく益荒男の言葉にすべき事ならじ いさめよ勇め いさむべし  
四 いさみに勇む過ぐ月日いつしか年も重ねつ、錦を纏い帰る日を

五 相模男児のわが友は指折り数へ待ちわびん  
撓まず折れぬ心もて己れが目途を仕遂げなし故郷の譽を掲げるべし

上手な詩とは思えないが、情味がある。「相澤親之助ぬしを送る」と、標題からして親愛の気持がこもっている。

「ぬし」は、『日本国語大辞典』によると、「敬意をもつて相手をさす語」で「尊敬の度はさほど高くなく、同輩以下のものに対して用いる」とある。

後年、坂本易徳は、相手に対して「おめえ」と呼ぶことが多かった。このエピソードは、後で触れよう。

このとき、坂本易徳は、満二十三歳である。あるいは、相澤親之助は、易徳より年齢が下であったかも知

れないが、はっきりした事は分かっていない。

それにしても、悲憤梗概家の坂本易徳は、溢れる程の心情で読みあげたに違いない。ともかく挫折した親之助への再起への応援歌である。

撓ゆまず折れぬ心もて己れが目途を仕遂げなし

とは、易徳が自分自身に言い聞かせた言葉でもあったに違いない。のちに、彼は撓ゆまず折れぬ心とは程遠く、職を転々するが、そんな事は、夢にも考えなかつたであろうが……。

ここで、もう少し相澤親之助について触れたい。親之助は、送別の宴の謝意として、「告別の辞」を、『函東会報告誌』(第三号明治二十二年十一月刊)に、次のように記している。

……明治十三年(一八八〇)六月笈を負つて上京し、大学医学部予備門に入り、大学予備門に轉じ、高等中学に移つた。不幸にも学業半ばに病氣となり退学した。明治

二十年十一月のことである。以来二年間、悶々として気が安まらず、その苦しみに心を痛めて、狭い自分の世界の中に閉じこもつて、先

き行きの見通しも立たなかつた。志のあるところを告げる術もなく、訴える処もなかつた。幾度か意を決して、

「魚腹ノ大小ヲ検シ、江流ノ浅深ヲ試ミタリ」(死に場所を捜した意味であろう)。しかし、天はまだ私を見離さなかつた。医薬が効いて、ようやく快復するようになった。不幸中の幸となつたのであろうか。しかし、時機は既に去り、

「鹿兒業巴ニ他手ニ獲ラレ渺茫タル荒原寂トシテ予ニ伴フナシ」どうして何処にわが身を托してよいであろうか、さ迷ひ躊躇つたが、

実のところ仕方がないかと、諦めるより他はなかつた。

鹿兒の意味がよく分らないが、虎の子に置き換えれば、家産は他人の手に渡つてという意味に受けとれ、

畑は荒れはてて静まりかえり、自分のためには、何の役にも立たない、と通釈できる。

親之助は、学校を転々としていたが、自分からの所業ではない。明治政府が、目まぐるしい程、教育制度を改革に改革を重ねたからに他ならない。

親之助が、医学部予備門に入学した年月は不明であるが、先に挙げたように、新制度の校名を挙げているので、あらましの年月は見当がつく。

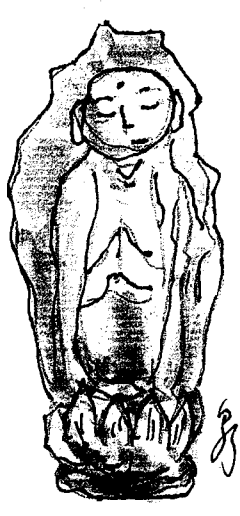
東大医学部予備門に同医学部予科が合併したのは、明治十五年(一八八二)六月。東大医学部予備門が独立して、文部省直轄の予備門となつたのは、十八年八月。そして、予備門が第一高等中学校(のちの一高)に改組されたのは、十九年四月である。

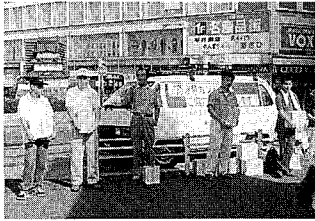
東大医学部予備門が置かれたのは、明治十年(一八七五)四月で、その修学年限は翌十一年六月に四年と定められた。

親之助が上京して退学する迄の間の年数は、七年五カ月となり、予備門の修学年限に較べて二、三年多い計算である。それに、予備門に入学したのは、明治十五、六年かと推定される。

進学が今日ほど激烈でないとしても、田舎出の青年が、いくら秀才でも、医学部予備門にひよいと入学できる事情でなかつた、かと思われる。

親之助は上京後、少くとも二年間は、入学準備のため、どこかの私塾に通つたのではなからうか。延助と親之助が親子関係にある別の面からの裏付けは、次回に廻すことにする。(続)





原水禁カンパ



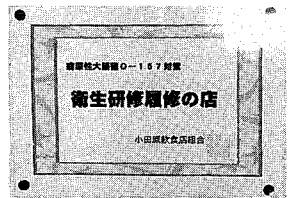
電線地下埋設作業  
小田原市本町～  
南町間国道1号線



横田三郎氏寄贈  
まろにえ会館中庭



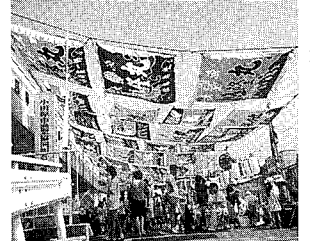
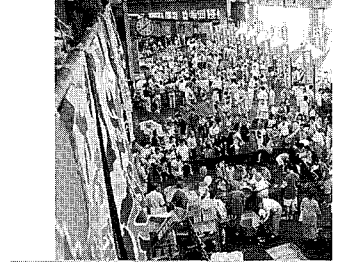
スーパーの売場で  
コダックのインスタ  
ントカメラも売っている



O-157対策



元城内小学校解体



港まつり



ルーズ・スタイルで

街  
いろいろ

小田原商工会議所主催大産業祭



あかりの祭典



御幸の浜砂防堰堤





# 市町村史

## ◇開成町史 資料編

近代・現代 A5九三ページ  
 編集 開成町  
 〒258 神奈川県足柄上郡  
 開成町延沢三三  
 Ⅷ〇四五(83)二三一

開成町は、酒匂川の扇状地に立地する、面積六・五㎏の傾斜の緩やかな平坦地で、農業を基盤とする生活が営まれて来た。酒匂川の清流に恵まれ、良質の米が作られる地として定評があった。反面、開成町の歴史は、水防の歴史といわれるほどに酒匂川の氾濫による被害を受けると、多くの復旧費を要し、復旧作業のため労力を提供しなければならなかった。

その開成町が大きく変貌するのは、昭和三十年代半ば以降のことで、工場の誘致によるものである。

今回発行は、古代中世近世(1)資料編、自然民俗編に続く三冊目(全五冊)で、明治四年の近代から昭和四十九年の現代に至る四百九十四点の厳選された資料で構成されている。

# 郷土誌等目次紹介

## ◇真鶴

平成八年刊  
 第三十五号  
 B5六四ページ  
 発行 真鶴町郷土を知る会  
 〒259-03 真鶴町岩岡〇六  
 櫻井 光夫方  
 Ⅷ〇四五(86)五三五

『真鶴町史』完成に  
 おもう 櫻井 光夫  
 ・真鶴村書上帳を読む 湯山 満  
 ・講話抄録「真鶴の漁業と人のくらし」 田辺 悟  
 ・北前船が運んだ小松石 石井 次郎  
 ・滝門寺宝釈迦像 川邊 昭治  
 ・真魚を釣る磯 湯本 満  
 『解説』江戸城と真鶴石  
 『真鶴』既刊号総目次

◇史談 足柄 第三十四集  
 A5三三ページ  
 発行 足柄史談会  
 〒250-01 南足柄市斑目五三  
 Ⅷ〇四五(74)二〇〇  
 ・安藤為次記念賞受賞に想う 市川 鉦雄  
 ・足柄山の金太郎伝説 榎林 一雄

童謡金太郎の歌詞に秘められた謎 笠間 吉高  
 ・文化財展 金太郎展 調査報告 南足柄の水車 その2 足柄史談会 調査研究部  
 ・矢佐芝・三竹方面史跡を訪ねて 渡辺 治美  
 ・相模国足柄上郡小市村・斑目村村誌考 市川 鉦雄  
 ・相模沼田城址 岩本 宣明  
 ・大雄山最乗寺への道 二十八宿燈 岩本 一作  
 ・江戸時代の小田原藩 稲葉時代 本多 秀雄  
 ・奥宮ほ場整備事業と農地の所有形態の変遷 瀬戸 清治  
 ・日本人と仏教発展への推移? 小見山 満  
 ・狩野と明神岳 高木 吉蔵  
 ・小田原御前相撲と荒川幸左衛門 小沢 勇一  
 ・水と生活 石村 豊

◇沼津史談 平成八年四月  
 第四十七号  
 A5二〇二ページ  
 発行 沼津史談会  
 〒410 沼津市平町一〇四  
 櫻井 信一方  
 Ⅷ〇四九(82)五三三  
 ・表紙解釈(豆内浦景縮図) 足立 実

お万の方事跡考補遺 益田 實  
 ・江原素六翁と笹見窪 高田 篤三  
 ・明治期の沼津短歌会(8) 城 直樹  
 ・大中正庭園の歴史 下山 光悦  
 ・偉大なる行者唯念上人 日吉 宗雄  
 ・葛山城主備中守 池田 幸枝  
 ・続「沼津十八景」を詠む 矢田凡子・杉山光男 川口和子・大野寛孝  
 ・鹿兒島暴徒出征中控置 足立 実  
 ・学祖と中興の祖(日本大の沿革) 関 為彌  
 ・咳臘神社と子の神社について 杉山 重義  
 ・ある戦死者遺家族の軌跡 青木 栄実  
 ・史跡見学会 (平成四・五年度) 中道 秀毅

◇時空(じくう) '96・5  
 第8号  
 発行人 鈴木 一正  
 発行所 〒234横浜市港南区 日野六一二一九一四四  
 鈴木一正方「時空の会」  
 A5七頁 五〇〇円  
 〒一六〇円

前山 光則  
 △論評▽「戦無派の昭和史」  
 一感情の問題 菊田 均  
 △小説▽  
 「冠岩寺の夏に」 椎名真珠子  
 △研究資料▽  
 「磯田光一参考文献目録」  
 一昭和35年一 鈴木 一正  
 一平成7年一  
 △小説▽  
 「銀狼む人の、七月」 篠原 敦子  
 △評論▽  
 「霧と雲と風」 大島エリ子  
 一九三三年夏・尾崎翠の恋  
 「戦無派び昭和史」 菊田 均  
 一武藤章と陸軍省軍務局  
 △研究資料▽  
 「最近における透谷研究 文献目録」(15)平成七年一月一 鈴木 一正

計報  
 青木正太郎氏  
 (小田原市早川七)  
 去る八月二十八日逝去されました。享年八十二歳ご冥福をお祈りします。

